

研 究 紀 要

富山大学杉谷キャンパス一般教育

第 45 号

(2017年12月)

目 次

教育報告

グローバル化時代における国際教育の展望と課題

—異文化理解の授業を通して—

..... ヨフコバ四位エレオノラ 1

研究報告

エツ・スギモトの初期作品

—日本文化の表象と作品の背景—

..... 水 野 真理子 11

教育報告

非接触式カードリーダーによる学生の出席管理方法

..... 堀 悦 郎 25

教育報告

グローバル化時代における国際教育の展望と課題 ー異文化理解の授業を通してー

ヨフコバ四位エレオノラ

1. はじめに

本稿では、教養教育科目として開講されている「異文化理解」という授業での教育の試みをもとに、国際教育の展望と課題について考慮する。本稿は、平成 28 年度（2016 年度）に実施された授業を具体例にとり、その授業の分析から見えてきた国際教育の実態を報告する。

2. 異文化理解と国際教育

異文化理解という概念は幅が広く様々な側面を含んでいる。簡単に言えば、異文化理解とは、自国の文化と異なる文化を理解し、尊重するということである。しかし、異文化を理解し尊重するということは具体的にどういうことであろうか、また我々が異文化を理解し尊重するためにはどのような行動をとるべきか、ということに関しては決まった答えはない。そのため、解釈も行動パターンも人によって異なる。梶田叡一（2011：11）は、国際教育の基礎は国際人を育てるということであり、その国際人を育てるということをして、「それぞれの地域での風習や文化について学び、人々の暮らしを支えている価値観や宗教を理解し、その地域に伝えられている優れた美術や音楽や文学等々について認識を持つということが必要になる」と定義し、また国際人になるということに関しては、「複眼思考ができるようになることである」と述べている。また、鎌田（2011：38-39）は、国際教育の資質は、「語学力」、「共生力」、「自文化への理解」を育てることにあると指摘する。

国際教育は何を目指すべきか、そしてどのような形で行うか、ということは、その教育を行っている教育機関の実施体制やポテンシャルによるものである。本報告の対象となっている「異文化理解」という授業は、実施回数が限られているため、時間の制約が授業でできることの大きな前提となっている。それに従い、授業の狙いは次のように設定された：

- ①受講生のこれからの人生や職業にとって重要であろうテーマを選定し、そのテーマについて学び、また意見交換しながら自身の意見を確立する。
- ②クラスに外国人留学生を招き、いくつかのトピックについて留学生とディスカッションを行い、異文化を体験しながら、他文化についての知見を深める。
- ③他文化との比較を通し、自文化を客観的に観る判断力を養い、自文化についての知見も深める。

3. 本授業の概要

「異文化理解」は、後期に開講され、15回から構成されている科目である。2016年度の履修者数は90名であった。その内訳は次の通りであった：医学部44名、看護学科22名（内2名が2年次生）、薬学部24名。2. で指摘された授業の狙いをもとに、授業の目標は、「異文化問題、国際交流への興味と関心を持ち、異文化に関するトピックについての対話活動やインタビューなどを通して、異文化や自文化についての知見を深める」というように設定された。授業は講義形式で行われたが、各回の授業でグループディスカッションの時間が設けられ、受講生が話し合ったことの結果およびトピックについての自分の意見やコメント等をコメントシートに書き、授業終了時にコメントシートを提出するという課題が課せられた。また、4回にわたり、キャンパスに在籍する外国人留学生（大学院生、研究生、研究員）との交流会が行われた。交流会におけるディスカッションは、基本的に日本語で行われたが、留学生が日本語で表現できないことに関しては英語使用が認められた。

授業で扱ったトピックとそのシラバスは表1の通りである。

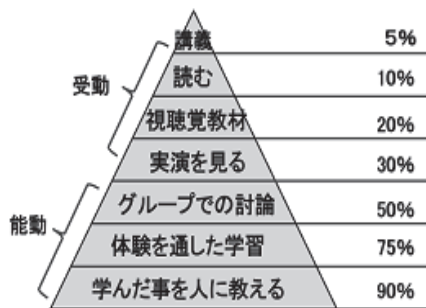
表1 「異文化理解」シラバス

1	文化とは何か・文化の定義・文化の要素（特徴）
2	コミュニケーションとは何か・コミュニケーションおよび異文化間コミュニケーションのメカニズム
3	日本文化
4	異文化交流会①
5	言語と文化
6	異文化交流会②
7	非言語的コミュニケーション
8	習慣・マナーと常識／非常識
9	異文化交流会③
10	異文化理解・異文化間コミュニケーションを阻害する原因
11	価値観とステレオタイプ
12	異文化交流会④
13	異文化適応・カルチャーショック
14	東欧の文化
15	世界のユーモアと異文化間コミュニケーション

本授業では、アクティブラーニングの形式の一つであるグループディスカッションが取り入れられた。本授業にアクティブラーニングの要素が取り入れられたのは次のためである。文部科学省が定め

ている（文部科学省、平成 24 年 8 月 28 日中央教育審議会）アクティブラーニングのコンセプトにもあるように、教員による一方的な講義形式の教育より、「学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ことができる。特に、体験が重要な要因となっている異文化理解教育にとっては、教員による一方的な教え方より、能動的に学ぶということの方が有効的であると考えられる。また、アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）の調査の結果で設定されたいわゆるラーニングピラミッド（図 1）が示しているように、アクティブラーニングによる学習定着率は、講義による学習定着率より高い。

図 1 「ラーニングピラミッド」【出典：溝上慎一，2014】



本授業で特に重視されたのは、上記のピラミッドにあるグループでの討論および留学生との対話による体験を通じた学習である。

4. 授業開始時の受講生の認識

授業開始時には、異文化に対する受講生の認識およびニーズを調査するためにアンケートを行った。そのアンケートには複数の項目があったが、特に次の項目とその回答に着目したい。

- ①これまでの異文化体験
- ②学習してきた言語
- ③学習してみたい言語
- ④訪れてみたい国
- ⑤異文化理解の重要性についてどう考えるか
- ⑥異文化を理解するとはどんなことか
- ⑦留学生と話してみたいトピック

①に関しては、7 名を除いて、ほとんどの受講生は異文化体験があると答え、またその経験は主に次のようなことであった：1）海外旅行または海外短期滞在、2）学校での異文化交流会、3）学校で外国人の先生に語学を習った、4）留学生・外国人と話した、5）国内で外国人を（道）案内した。

②の学習してきた言語に関する回答は英語に集中していたが、何人かの受講生は、大学入学後に学

習し始めたフランス語やドイツ語、また中国語も例として挙げていた。一方、③の学習してみたい言語に関しては、受講生の関心の幅が広く、イタリア語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語、デンマーク語、モンゴル語、ギリシャ語、ベンガル語等とバラエティに富んだ言語が挙げられていた。また、それに関連し、他文化への関心の広さが窺える回答も多く、受講生が④訪れてみたい国として挙げていた国の中には、ホンジュラス、パラオ、ボリビア、ブラジル、インド、モルディヴという国があった。

⑤、⑥、⑦の質問は、本授業の内容と目的に最も関係している質問であった。⑤、⑥の回答からは授業開始前からの受講生の異文化に対する高い意識が窺えた。「異文化理解の重要性」については、全員が重要であると答えていた。その理由としては次のようなことが挙げられていた：社会のグローバル化や将来の自分の仕事への役立ち、多様な考え方や価値観を知る重要性、視野の広がり、円滑なコミュニケーションのため、自文化に対する客観的な見方のため、差別や偏見をなくすため。また、⑥「異文化を理解する」こととはどんなことかということに関しては、認め合い、偏見を持たない考え方、多数の言語や習慣を知るということが指摘されていた。

授業開始時のアンケートからは、多くの受講生が外国人留学生との交流会を望み、異文化理解の授業を履修していることがわかった。しかし、⑦留学生と話してみたいテーマについては、回答の多くがステレオタイプのなもの（日本の善し悪し、日本のイメージ、食文化等）であった。これらのステレオタイプの回答は、授業の重要な課題、すなわち、意義のある交流会にするために、交流会で話し合われる内容については教員のコントロールと指導が必要であることを示してくれた。

5. 受講生の気づきと授業の成果

ここでは、留学生との異文化交流会およびコースの後半に行われた「異文化理解を阻害する原因」、「異文化適応」という授業に焦点を当て、受講生の気づきと授業の成果についてまとめる。

留学生との交流会は4回にわたり行われた。それぞれの交流会のトピックは「日本・日本文化」、「コミュニケーション（言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーション）」、「習慣とマナー」、「価値観」であった。各回の交流会の前に、同じトピックについて教員の講義によるブレインストーミングが行われた。また、留学生と話し合うトピックの主な項目（日本語と英訳）のタスクシートは、教員が作成し、事前に受講生と留学生に配布した。受講生には、それ以外に、話し合いで分かったこととそれに対する意見をまとめるコメントシートも渡した。コメントシートは、回収し評価の対象とした。

異文化交流会に参加した外国人留学生の国籍は、中国、モンゴル、インドネシア、ネパール、バングラデシュ、エジプト、ベラルーシ、カナダ、ハンガリーであった。

5. 1. 異文化交流会

1回目の異文化交流会のテーマは「日本と日本文化」であった。この交流会の狙いは、他国の人が日本と日本文化をどう考えているかを知り、また受講生が自国や自文化について持っているイメージ

と外国人が日本と日本文化について持っているイメージを比較し、違いを意識しながら、日本と日本文化を客観的に観るということであった。交流会が行われる前の授業では、受講生に自分の文化の特徴について聞き、コメントを書いてもらった。受講生が指摘した日本文化の特徴は、「協調性を重んじる」、「自己主張をあまりしまい」、「集団主義」、「礼儀を大切にする」、「宗教に縛られない」、「繊細」、「曖昧ではっきりしない」、「おもてなし精神」、「排他的」ということであった。

交流会で話し合われるトピックの具体的な項目は教員が定めたが、教員が定めた項目以外に、受講生が自由な質問をするという設定もなされた。交流会で話し合われた内容は具体的に次のようなことであった：①留学生が日本または富山大学を留学先に選んだ理由、②留学生が日本での生活において良いと感じていることと大変だと感じていること、③留学生の国・文化と日本・日本文化の違い、④留学生の国の人が持っている日本（人）のイメージ、⑤留学生が日本に来て変わったこと、⑥留学生が日本人に（日本で）学んだこと、⑦留学生が日本でやってみたいこと。交流会はグループで行われ、留学生が複数のグループを回り、同じトピックについてディスカッションを行った。

ここでは、③、④、⑥に関する結果および受講生のコメントを中心に考察したい。

③と④に関しては、同じ回答が含まれていたため、まとめて考察する。留学生がポジティブなイメージとして指摘したのは、「真面目」、「勤勉」、「親切」、「正直」、「時間に正確」、「自制心がある」ということであり、また国との主な違いとしては、「治安がよい」、「サービスがよい」ということであった。一方では、ほとんどの留学生は、受講生が自らの文化の特徴として指摘していた「自己主張をしない」ということをネガティブな側面を持つ特徴として指摘し、日本人が自分の考えや思いを主張せずに黙っているということを「積極性に欠けている」として解釈していた。

一方、⑥に関しては、留学生は、主に「時間を守ること」と「個々を尊重すること」を挙げていた。

1回目の交流会の受講生のコメントからは、受講生がこの交流会を通して多くのことを学び、様々な気づきがあったことがわかった。受講生の気づきには次のようなことがあった：

- ・日本人の「物静かな態度」が消極的なイメージを与えていることに驚きを感じた。
- ・自分の意見をしっかり述べて積極的にコミュニケーションをとっていくことの大切さを実感した。
- ・日本で暮らしていれば実感がなく、あまり気づかないようなことや新発見がたくさんあった。
- ・他国の人とのコミュニケーションによって同じ空間で一緒に過ごすグローバルな時がすてきだと感じた。
- ・日本文化についていろいろと気づかされた。また、比較を通して日本文化を客観的に観ることができた。
- ・固定概念について考えさせられた。
- ・今まで自分が異文化に対していかに無関心だったか実感させられた。
- ・これから留学したり外国へ行ってみたいと思うようになった。
- ・日本から離れてみないと「日本らしさ」がわからないことがわかった。

2回目の交流会のトピックは「コミュニケーション」であったが、この交流会では言語的コミュニケーションだけでなく非言語的コミュニケーションの特徴についてもディスカッションが行われた。

時間に制約があったため、教員による事前のブレインストーミングは、言語的コミュニケーションのみにて行われた。この交流会の目的は、普段接することのない言語に触れることと、日本語の本質や特徴について客観的に考え、意識することであった。また、もう一つは、文化による非言語的コミュニケーションの違いを知り、非言語的コミュニケーションの違いが誤解やミスコミュニケーションを招き兼ねない原因になり得るということを認識することであった。

本交流会からの受講生の気づきは他言語との類似に集中していた。より厳密に言えば、多くの受講生は、日本語とモンゴル語、また日本語とハンガリー語が類似を持っていることに驚いていた。事前の教員の講義によるブレインストーミングでは、言語の親族関係や系統について紹介されていたが、受講生が講義で聞いた内容より留学生との話しで分かったことの学習定着の方が高いことが判明した。このことから、アクティヴラーニングの有効性が立証された。

2回目の交流会では、日本語についても多くの発見があった。交流会の前に行われた日本語に関する意識調査では、受講生が日本語の特徴または非母語話者にとって習得困難な日本語の側面として指摘していたのは、主に漢字と敬語であったが、留学生へのインタビューを通して、それまでに気づいていなかった日本語の特徴、すなわち擬態語や数量詞（ものの数え方）、日本語の曖昧さという特徴に気づかされた。そして、受講生は、本交流会の言語的コミュニケーションの話し合いから学んだことについては、母語話者が何気なく使っている母語のある特徴が、非母語話者にとっては以外と難しいが、母語話者がそれにあまり気づくことがないというコメントを残していた。

また、非言語的コミュニケーションについてのディスカッションを通しては、受講生は、普段ほとんど意識することがないこのタイプのコミュニケーションの大切さに気づかされた。特に、受講生にとって大きな発見だったのは、異文化における発話者同士の距離感覚やサインランゲージにおけるサインが表す意味の違いであった。非言語的コミュニケーションの大切さに気づかされた受講生は、自分の国では特に大きな意味のないことであっても他国においては絶対に禁じられていたり失礼に当たることがあったりし、何気ない身振りがトラブルを招くことがあることを意識したというコメントを残していた。さらに、日本人のコミュニケーションパターンでは、非言語的コミュニケーションで補われる部分が多々あるが、他言語でのコミュニケーションではそれに明示的な言語的表現が使われることが多いという気づきもあった。本交流会から得られた成果に関して、受講生は、異文化を持つ他者と意志疎通をするためには、お互いの言語だけでなく、その文化の背景を理解しようとする姿勢が必要であると感じたと記していた。

3回目の交流会では、留学生はパワーポイントを使い、自国および自国の習慣やマナーについて発表を行った。発表では、英語の使用も認められた。この交流会のためには、受講生には2つの課題が課せられていた。一つは、留学生の発表を聞き、他文化の特徴や習慣・マナーについてわかったことをまとめ、日本との違いについてコメントを書くということであった。さらにもう一つは、授業に臨む前に、発表を行う留学生の国について調べ、関心または疑問のあることについて、留学生の発表を聞いた後、質問をするということであった。

留学生の発表で受講生が興味を示し、コメントを残した他文化の習慣や特徴を表2に示した。

表2 「他文化の習慣や特徴」

国／文化	習慣・特徴
インドネシア	高齢者を大切にすること；宗教による挨拶の仕方に制約があること
バングラデシュ	年中行事や結婚観
エジプト	ラマダンと食文化
ハンガリー	クリスマスの過ごし方
中国	食文化や食事のマナー
モンゴル	祭りや子供の遊び

二つ目の課題に関しては、全員は事前に調べ、調べたことについて短いレポートを書いたが、留学生には質問はしなかった。質問をしなかった理由はコース終了時の授業評価アンケートから明らかとなった。その理由は次の2つであった。一つは、全員の前で質問をするのが恥ずかしくて、質問はしたくてもできなかったということであった。もう一つは、英語で話していた留学生に対し英語で質問をする自信がなく、遠慮し質問をしなかったということであった。受講生のこれらのコメントからは、本授業の二つの問題点、すなわち授業形式及び英語使用の問題点が浮き彫りとなった。

最後の交流会のテーマは価値観とステレオタイプであった。交流会の前に、受講生には受講生が考えている日本文化の価値観やステレオタイプについてアンケート調査を行った。交流会では、留学生に自文化の価値観と、自国の人々が持っている日本に対するステレオタイプのイメージを紹介してもらった。2つの授業から「価値観とステレオタイプ」について分かったことを表3に示した。

表3 「価値観とステレオタイプ」

日本人が考える日本人の価値観とステレオタイプのイメージ	外国人が考える日本人のステレオタイプのイメージ	外国人が考える自国の文化の価値観
協調性 上下関係 男尊女卑 仲間意識（集団主義） 時間厳守 年功序列 恥	勤勉（モンゴル、エジプト、カナダ） お辞儀をよくする（モンゴル） 怖い映画が好き（モンゴル） 真面目（モンゴル） 落とし物が出てくる（インドネシア） 他人を気遣う（カナダ） 相づちをよく打つ（中国）	（モンゴル）自国の文化の継承 （エジプト）家族を大切にする （中国）親孝行 （インドネシア）近所づきあいを大切にする （カナダ）いろいろな文化を受け入れる

本交流会をより有意義なものとするためには、交流会が行われる前に、受講生にも、日本人が留学

生の国や文化に対して持っているステレオタイプのイメージについてアンケート調査を行うべきであったが、最後の交流会にはどの国の留学生が参加できるかということが交流会直前まで決まらず、事前の調査やブレインストーミングが困難となった。この問題を教員側の反省点と意識し、今後の課題にしたい。

5. 2. 異文化理解と異文化適応

最後に、「異文化理解の阻害原因」、「異文化適応」という授業で扱われたトピックに関する受講生のコメントを通し、受講生の異文化に対する認識を考察したい。

八島と久保田（2012）は、異文化理解及び異文化間コミュニケーションを阻害する要因として1）「皆と同じ」という前提、2）ステレオタイプ、3）偏見、4）エスノセントリズム、5）評価的な態度と極度の不安、6）言語・非言語解釈の違い、7）暗示的なコミュニケーション、8）差別的なまなざしを挙げている。専門家によって指摘されるこれらの要因を、受講生がコースを通し感じたことの結果として指摘した原因と比較し、受講生の異文化理解に対する意識を確認したい。

異文化理解の阻害原因として受講生がもっとも多く挙げたのは、「言語の違い」であった。この指摘には、本コースを通して受講生が自らの語学力について認識したことが反映されているようにも思える。次に回答が多かったのは、「偏見やステレオタイプの考え方」であった。また「偏見やステレオタイプの考え方」と並び、多くの受講生が指摘したのは「文化・習慣・価値観の違い」であった。そのほかに、「宗教の違い」や「知識のなさ」も挙げられていた。これらの回答からは、受講生の異文化理解問題への真剣なまなざしが窺える。

コースのおわりに実施された「異文化適応」の授業では、受講生に表4にある異文化感受の6段階（Bennett, 1986）を提示し、自分が今どの段階にいるか、についてアンケート調査を行った。受講生の回答の結果は次の通りとなった。

表4 「異文化感受」

1 無知から認識できない	1
2 偏見	1
3 表層的な相違を受容する	55
4 全面的な相違を受容する	5
5 異文化の人と効果的にコミュニケーションできる	0
6 複数の文化を自己の中にうまく統合できる	0

受講生の回答はレベル3に集中した。このことから、受講生のある種の「用心深さ」（つまり、アンケートを受ける者としての、アンケートの中より中立的な項目を選ぶ一般的な心理）も感じられるとも言えるものの、大部分の受講生が自文化と異文化の違いに気づき、自分とは違う価値観をもつ文化に対し理解を示し始めているとも言える。残念なことに、1と2をそれぞれ選んだ1名ずつもいたが、こ

のような回答があったことを教員側の反省点としても受け止め、授業を通して伝えるべきことを改めて考えるためのきっかけとなった。一方では、うれしいことに、異文化を全面的に受け入れる立場にある何名かの受講生もいた。このような結果は教員の励みとなった。

6. おわりに

本稿は、「異文化理解」という授業を通し、国際教育の展望と問題点について考察するということを目的にした。学期末に実施された授業評価アンケートの結果が示したように、本授業に対する受講生の満足度が高く（全体の満足度は部局平均4%と同じく4%であった。その内訳は、32%が満足、39%がやや満足、27%が中立、2%がやや不満であった）、また、本コースのはじめに設定された目標が達成され、授業は一定の成功を収めたと言える。

本コースを終え、「異文化理解」という授業から見てきた国際教育の可能性については次のように言える。

本授業の試みとして、4回にわたり交流会が行われ、受講生が留学生との対話を通し、「生」の異文化に触れ、講義だけでは感じられない他文化の事情を知ることができた。

また、授業にはアクティヴラーニングの形式であるグループディスカッションが取り入れられ、それによって、受講生が教員から一方的に与えられる情報を鵜呑みにするのではなく、自らの力で異文化の様々なトピックについて考え、他の受講生と意見交換しながら、自分の意見を確立することができた。

一方では、いくつかの問題点も見えてきた。一つはクラスの数である。「異文化理解」という授業が教養科目の一つであるため、クラスが大きくなることがやむを得ない事情ではあるが、大人数のクラスは、次の理由のため、本授業の交流活動には適しない。その理由とは、留学生の手配の問題である。杉谷キャンパスに在籍している外国人留学生がさほど多くないので、毎回の交流会に一定人数の留学生を確保することが難しく、受講生と留学生の数にはアンバランスが生じ、一人の留学生が対応しなければならない日本人のグループが15名を超える場合もあった。そのため、受講生の一部が積極的に話し合いに参加できないことが起きてしまっていた。

さらなる問題点は教室の問題であった。これに関しては、受講生の期末の授業評価アンケートにも指摘されていたが、授業に割り当てられていた教室は、机が動かせず、本授業の活動には適しなかった。

最後に、受講生と留学生が使用していた共通言語の問題が指摘できる。話し合いでは、英語を使用していた留学生もいたので、受講生の一部にとっては英語が大きな壁となり、言われていたことを十分に理解できなかったり、また英語で質問する自信がなかったりして、交流に積極的に参加できなかったこともある。

今後は、これらの問題点を再検討し、改善を図る必要がある。

授業評価アンケートとは別に、コースの最終回に独自のアンケートも行い、授業で実施された活動および取り上げられたトピックで受講生が最も興味をもったことについて質問をした。活動に関して

は、留学生との交流会が第一位であった。また 4 回行われた交流会の中、受講生が最も興味を示したのは「外国の習慣とマナー」というセッションであった。一方、授業で取り上げられたテーマに関しては、受講生が最も関心を示したのは「世界のユーモア」というテーマであった。さらに、今回のコースでは扱わなかったが、取り上げてほしかったテーマに関しては、外国の歴史、スポーツ、建築というテーマが挙げられていた。

本稿で「異文化理解」という授業をもとに、国際教育について考察してみた。本稿の分析からも明らかとなったように、授業の構成や内容、また実施方法をめぐりまだ課題が残っている。今後は、これらの課題の解決策を求め、授業の改善に努めたい。

参考文献

Bennett, M. J., 1986. A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 179-196.

『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』平成 24 年 8 月 28 日中央教育審議会、文部科学省 HP。

梶田叡一「国際教育の主要課題は何か」、梶田叡一責任編集『国際教育の課題と展望』金子書房、2011 年、9-14。
鎌田首治朗「国際教育の必要性和日本語教育の重要性」、梶田叡一責任編集『国際教育の課題と展望』金子書房、2011 年、38-48。

八島智子、久保田真弓『異文化コミュニケーション論』松柏社、2012 年。

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014 年。

[ヨフコバ四位 エレオノラ]

[富山大学医学部（教養：日本語日本事情）]

研究報告

エツ・スギモトの初期作品
—日本文化の表象と作品の背景—

水野真理子

1. はじめに

エツ・イナガキ・スギモト (杉本鉦子: 1872-1950) は、1920年代半ば、アメリカおよび西洋諸国で彼女の著作『武士の娘』(*A Daughter of the Samurai*) (1925) がベストセラーとなり、国際的な注目を集めた女性作家である。日本ではその功績があまり知られていないが、近年、彼女については、欧米諸国の読者に、日本文化や日本精神について流麗な英文で紹介し、異文化理解の促進に貢献したすぐれた国際人だとして再評価する動きが出ている¹。そして、『武士の娘』についてはもとより、彼女の出自や足跡、伝記的背景についての研究が進められている。また、彼女が新聞雑誌に寄稿した英文著作も、『エツ・スギモト (杉本鉦子) 英文著作集』(2013) として復刻され、研究の基盤が整備されつつある²。

再評価の機運のあるスギモトであるが、その一方、彼女の作品に関しては、おもに『武士の娘』に焦点が当てられ、それ以前の習作時代については、筆者の知る限りほとんど検討されていない。『武士の娘』が出版される1925年までの執筆活動は大きく三つの時期に分けられる。第一期は、1901年から1902年にかけてで、スギモトの渡米後はじめての執筆である。1901年3月17日、『シンシナティ・インクワイアラー』(*Cincinnati Enquirer*; 以下『インクワイアラー』と記す) に「古風な日本」(“Quaint Japan”) が掲載され、その後1902年6月まで、同紙には5点のエッセイが掲載された。また1902年6月から同年12月までは、ニューヨークの『ブルックリン・デイリー・イーグル』(*Brooklyn Daily Eagle*, 以下『ブルックリン』と記す) にも5点の作品が掲載されている。そして第二期は、スギモトがしばらく日本に帰国した後、再渡米してからの執筆で、1916年から1918年にかけてである。第一期と同様に、『インクワイアラー』には1916年8月から9月にかけて5点のエッセイ、またフィラデルフィアの『イブニング・パブリック・レジャー』(*Evening Public Ledger*) には1918年5月から8月まで7点の作品をスギモトは寄稿している。そして第三期は、『武士の娘』のもとになった雑誌連載で、1923年11月

¹ スギモトの研究は1980年代から長岡市の人々による歴史研究会(「武士の娘研究会」, 「長岡史楽会」)を中心に行われてきた(佐々木佳子『「武士の娘」の周辺』『長岡郷土史』30号, 1993, 141-144; 青柳保子「杉本鉦子研究『武士の娘』に書かれなかったこと その一」『長岡郷土史』31号, 1994, 120-136)。青柳には『「武士の娘」の舞台裏 杉本鉦子の生涯を探し求めて』『アジア系アメリカ文学研究会』16号, 2010, 31-38など継続的に発表してきた一連の論稿がある。その後1990年代に入ると、地元の人々だけではなく、より全国的な研究者の目にも留まるようになり(平川節子「アメリカと日本における杉本鉦子の『武士の娘』」『比較文学研究』63号, 40-56; 大西麻由子「国際理解教育をめぐる今日的課題—日米文化間に生きた *A Daughter of the Samurai* の生活史を手がかりに」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』49号, 1999, 1-9; 内田康雄『鉦子—世界を魅了した「武士の娘」の生涯』(講談社, 2013)), また杉本との直接、間接的な関わりを持つ人々によっても、彼女の人物像や著作の研究がなされるようになった(多田健次『海を渡ったサムライの娘 杉本鉦子』(玉川大学出版部, 2003))。また地元メディアやNHKでも取り上げられ、スギモトの人物像が映像化されている(新潟テレビ21「杉本鉦子の生涯」1995年; NHK BSドキュメンタリー「武士の娘 鉦子とフローレンス—奇跡のベストセラーを生んだ日米の絆」2015年)。その他研究史については、植木照代『別冊 エツ・イナガキ・スギモト (杉本鉦子) 英文著作集』(エディション・シナプス, 2013) が詳しい。

² 植木照代編『エツ・イナガキ・スギモト (杉本鉦子) 英文著作集』(エディション・シナプス, 2013)。

から『アジア』(*Asia*)に11回にわたり『サムライ』の娘(“A ‘Samurai’s Daughter”)を寄稿している。こうした執筆活動において生み出された初期作品が、いかなる内容で、そしてどのような背景のもとで書かれ、また読まれたのかを探ることは、『武士の娘』で一つの頂点に達するスギモトの作品の評価、および受容がどのような流れにおいて起こったのかを理解するのに、不可欠なものであろう。

こうした問題意識のもとに、本小論では、まずスギモトの初期作品を読解し、そこに現れる日本文化論の特徴をまとめてみたい。そしてそれを踏まえながら、新たな新聞資料も加え、どのような背景のもとで作品が生み出されたのかを推察してみたい³。

2. 「武士の娘」スギモトの経歴

作品の考察に入る前に、まずスギモトの経歴を確認しておこう⁴。スギモトは、1872(明治5)年6月20日、旧長岡藩藩頭家老、稲垣平助の6女として新潟県古志郡川崎村地蔵町に生まれた。父平助は、宿屋、印刷業などで生計を立てていたが、1885(明治18)年、まだ14歳の鉦子ら家族を残し、50歳でこの世を去ってしまう。その後、鉦子が渡米することになったのは、15歳年上の兄、平十郎(別名: 央^{なかいぼ})の影響が大きい。父が亡くなった翌年、渡米していた兄が帰郷し、彼は、アメリカでの恩人で、オハイオ州シンシナティで日本の美術骨董店を営む杉本松之助との結婚を鉦子にすすめ、鉦子も承諾し、二人の婚約が成立する。そして鉦子はアメリカでの生活に向けて、英語を学ぶために兄と上京し、華族女学校、海岸女学校、東京英和女学校で学び、1893(明治26)年、浅草の美以美小学校の教師となる。そして5年後の1898(明治31)年、同小学校を退職し、松之助の待つシンシナティへと渡った。結婚式の際、鉦子の介添人を務めたのが、彼女より16歳年上のフローレンス・ウィルソンであり、彼女はその後、鉦子の生涯の友となり、多大な影響を与えた。挙式後、夫婦はフローレンスと生活をともにする。1899(明治32)年、長女花野が誕生、1904(明治37)年には次女千代野が誕生し、幸福に包まれた家庭であったが、1908(明治41)年、松之助の営む美術骨董店「ニッポン」は倒産してしまう。さらに追い打ちをかけるように、鉦子と娘二人が日本に帰国中、夫は盲腸炎のため急死した。女手一つで子供たちを育てていくという厳しい人生が始まる。日本キリスト教婦人矯風会で職を得、またフレンド女学校で英語を教授した。娘の教育のありかたに悩んだ末、アメリカでの教育が娘たちには適しているのではと思い、1916(大正5)年再渡米し、ふたたびオハイオ州に住む。その後ニューヨーク市に移り、娘たちはそれぞれ進学して勉学に励み、鉦子は執筆活動に専念した。また1920(大正9)年にはコロンビア大学の日本語、日本文化史の講師となった。そして、1925(大正14)年、『武士の娘』をダブル・ページ社より出版する。翌年、日本に帰国後も執筆活動を続け、1932(昭和7)年『成金の娘』(*A Daughter of the Narikin*)、1935(昭和10)年『農夫の娘』(*A Daughter of the Nohfu*)、1940(昭和15)年『お鏡お祖母さま』(*Grandmother Okyo*)を出版する。第二次世界大戦の戦禍を生き延び、1950(昭和25)年、東京白金の次女の千代野宅で、78年の生涯を閉じた。

³ 本稿で扱うスギモトの寄稿文については、植木、『スギモト英文著作集』による。そのほかの新聞記事については、インターネットサイト(<https://news.paper.com>)でのデジタル新聞資料による。

⁴ 経歴については主に植木、『別冊 スギモト英文著作集』、16-30を参照。

3. スギモトの日本論にみられる特徴

では実際に、スギモトの日本論にみられる特徴、そこから何が見えるかについて考察してみたい。各エッセイの要約については巻末にまとめた。興味深い特徴として以下の三つを挙げたい。

まず第一点は、杉本の日本論が女性の視点から、そして女性読者を意識して書かれている点である。日本の行事や慣習の説明がなされるのだが、その際、女子のたしなみや嬬など、女子教育のためになされているという説明が、よく見受けられる。例えば、「古風な日本」においては、3月3日の雛の節句が取り上げられ、その祝いのための準備や様子が語られる。そこにおいて強調されているのは、女子の家事についての教育である。スギモトによれば、雛の節句の起源は2,000年前に遡るが、それが実際の教育の場となったのはここ200年ほどであるといい、エッセイの最初からそこに見られる教育的側面を強調する。そして、古くは、娘たちは、女中たちと互いに自由に交流するなかで、家事などを教わってきたが、封建制度が完成していくにつれて、家庭内における身分や立場の差も明確になり、旧来のような家庭的な事柄についての学びや習得がなされなくなった。そこで、女子たちが様々な点において、注意深く躰けられることの必要性が認識され、それはまた彼女たちを「役に立つ主婦として、美しい女主人として、また忠実な妻で賢明な母として」(a useful home mistress, a graceful hostess, a faithful wife and a wise mother) 教育するために、必要なことであるとスギモトは説明する。こうした意識にもとづいて、雛人形や雛飾りにとりまなう漆器や家具は、アメリカの日本雑貨店に売られているような子供向け玩具ではなく、代々受けつぐ装飾品として丁寧に扱われるべきものだと言主張する。また雛の節句を祝う際には、客人を招くときの料理や作法も学ぶという。

また、女性の服装についても焦点が当てられている。後に少し触れるが、19世紀半ばから20世紀初めにかけて、アメリカの新聞や雑誌では、女性の服装についての特集記事がよく見受けられる。19世紀半ばの初期女性雑誌の売り物は、そこに掲載される「服の型紙」だったという。この時期は、アメリカにおいて女性雑誌を含む雑誌の出版部数が急激に増加し、センチメンタルな小説を描く女性作家の活躍、そしてそれを楽しむ女性読者層の確立がみられた時期だった⁵。スギモトの掲載記事も、そうした機運を反映している。「日本の哀愁漂う悩み」(“Japan’s Pathetic Struggle”) (『インクワイアラー』1901年10月22日)は、その当時の日本で議論が盛んだったという、和装か洋装か、そしてどのような服装が適切かという問題をテーマとしている。記事の中央には、大きく三枚の絵もしくは写真が掲載されている。中央上には、天皇后両陛下とおぼしき人物が、従来の伝統的和装に身を包んでいる姿、中央下は「近代的パリ様式の影響」(The Influence of Modern Parisian Models)と説明が付されており、ウエスト部分が狭まり肩を出したドレスに、大きな花がついたベールをかぶる、皇族または華族と思われる女性の姿が載っている。その右に、「妥協案」(The Proposed Compromise)として、着物の打掛のデザインを残したまま、頭には西洋的なベールを若干日本風にアレンジしたものをかぶる女性の絵が掲載されている。こうした女性の服装を話題にするなかで、スギモトは、急激な近代化によって起こった社会的な変化のせいで、真の日本的伝統を知っていたはずの階級の人々がもはや上流階級ではなくなり、その一方、にわか上流社会へ躍り出た人々が、西洋的な文化と日本の文化を奇妙な形で合わせているという点を嘆きながら、しかし古くからある日

⁵ 亀井俊介編『アメリカ文化史入門』(昭和堂、2006)、203-204。

本の真の心は変わるものでないと主張している。

第二点は、日本文化に対して、アメリカの読者の共感や興味が得られるように、読み手の理解に配慮している点である。ここからは、日米の文化交流を促したいというスギモトの希望が窺えよう。例えば、「日本のハロウィーン」(“The Japanese Halloween”)『インクワイアラー』1901年10月27日)では、月見の慣習を説明する際、ハロウィーンになぞらえることで、アメリカの読者の興味を引くような工夫がなされている。ハロウィーンと類似している点としては、日本の月見が、梨や西瓜、葡萄など丸い野菜や果物を、団子や兔型に整えたさつまいものお菓子とともに供え、収穫に感謝する意図があること、また男の子たちが楽しい悪戯に興じることなどが挙げられる。また西瓜は、ハロウィーンにおけるカボチャのジャック・オー・ランタンのように、中がくり抜かれ、外側に木などの装飾的な絵が彫られ、提灯として明かりを灯すと説明されている。その一方、ハロウィーンとは異なり、日本の月見には芸術的、詩的な面があり、それは月の美しさを静かに鑑賞し、月明かりのもとで俳句や短歌などを詠み合う点を紹介し、記事にはその様子を描いた絵が中央に掲載されている。

また、いくつかのエッセイのなかには、フローレンス・ウィルソンを「友人」(my friend)として登場させている。実際に長岡に帰郷した際、フローレンスも同行したからでもあるが、日本文化に対するアメリカ人女性の反応を書き入れることで、それを読むアメリカの読者は、より感情移入することができ、また日米双方の文化的差異や共通点などが際立ち、読者の興味を引くのに役立ったのではと思われる。「ミカドの国で」(“In the Land of the Mikado”)『ブルックリン』1902年6月1日)においては、日本と故郷長岡へ向かうまでの道程において、ハワイから横浜に寄港し、スギモト、娘の花野、フローレンスの三人が、横浜の元浜町の宿「マツザカヤ」に宿泊した際の、部屋の様子や食事、また周囲の様子などを記している。朝食をどうするかが心を砕く点だったとスギモトは述べている。というのは「友人」はこれまで日本の滞在経験はあったが、その際は常に西洋風のホテルに泊まっていたため、日本的な慣習の宿に泊まるのは今回が初めてであった。そのため、スギモトは彼女が日本的な不便さに対してどのように思うか懸念していたようだ。しかし、スギモトの心配は取り越し苦労となり、「友人」はお膳の上に載せられたいくつかの小鉢、そこに盛り付けられた日本食を楽しみ、とても安堵したと書いている。またスギモトはお膳を前にしたときに、彼女が教わってきた日本のしきたりや躰などが蘇ってきたが、それと同時に、そこにはアメリカ文化にも見られる実用的側面という共通点も見えてとれたと述べている。あまり詳しくは言及していないが、その真意は、例えば各自に用意されるお膳が、テーブル代わりに也成了り運びやすく用意や片づけがしやすいなどといった利便性について、思いめぐらしたのではないかと推測される。アメリカ生活を経験しているスギモトは、里帰りした日本での文化に改めて接し、新たな視点からアメリカ文化との共通点を見出そうとしている。

第三の特徴としては、スギモトの作品にも、それまで作り上げられてきたような典型的な日本イメージが見られる点である。「ミカドの国で」の初めには、おそらく新聞社の記者によるスギモトについての説明書きがある。そこには、身分の高い出自であるスギモトが、「これまで決して語られたことのない日本の生活を記す」(In her letters, she is to tell of Japanese life as it was never told of before.)と記述されている。しかし、彼女の作品のなかには、これまでの外国人による日本論、紀行文に表れる典型的と思われる日本的な事象やイメージが同様に出現している。その比較対象として、ラフカディオ・ハーンの日本論を挙げてみよう。1901年以前までにハーンが出版したのは、『知られぬ日本の面影』(1894)『東の国から』(1895)『心』(1896)『仏の畑の落穂』(1897)

『異国情趣と回顧』(1898)『霊の日本』(1899)『影』(1900)『日本雑記』(1900)など多数ある。スギモトは「死者の魂」(“Spirit of the Dead”)『インクワイアラー』1901年7月28日)では8月13日から15日まで行われる夏の行事、盂蘭盆について、また「死者を偲ぶ悲しい儀式」(“Sad Ceremonial in Memory of the Dead”)『ブルックリン』1902年10月12日)ではスギモトの父の命日に行われた法事の様子を描いている。それらは、死者の魂を敬う日本の伝統行事、祭祀であり、こうした死者の靈魂を偲ぶという祖先崇拜の宗教的精神は、ハーンがまさに日本に特徴的な国民的精神として注目し、その内実を解明しようと試みてきたものだった。また、スギモトは「日本のハロウィーン」で月見の慣習を説明する際に、子供たちが規律をしっかりと守ったうえで、悪戯に興じなくてはならないのは、月の女神に対しての敬意を保つためだと述べ、日本人の慣習のなかに様々な神の存在があることを暗示している。このような、多神教の国だという点も、ハーンが日本に対して強い関心を示した点であった。また、桜の美しさ、人力車、横浜の宿に滞在したときの夜に聞こえた汽笛の音や、物売りの声、人や事物が小さく輝いていて玩具のように見える点なども、ハーンが彼の紀行文で書いてきた日本表象と共通する側面がある。さらに、道が箒で掃いたように綺麗だと、日本人の清潔さについてスギモトが再認識し、逆カルチャーショックを受けているところも、ハーンが日本の清潔さに驚愕の目を向けていた点と相通じている。スギモトがハーンの著作を意識してエッセイを書いたかどうか、その点について明らかにする必要があるが、少なくとも読み手は、スギモトの作品にハーンの日本論でも見受けられたものと同じ表象を見出し、神秘的で妖精の国のようだとハーンが表現した日本のイメージをさらに強めたのではと考えられる。

4. 作品執筆の背景

それでは、上述のような特徴を持つエッセイを執筆したその背景はどうだったのだろうか。なぜスギモトは『インクワイアラー』や『ブルックリン』に記事を投稿し、採用されたのだろうか。またどのような読者が存在し、また当時の日本の印象はどうだったのだろうか。このあたりの詳細な事情はまだ調査中であるが、判明している範囲でまとめ、また留意すべき点、関連があると考えられる点を挙げてみたい。

第一に、スギモトの執筆に影響を与えた重要な存在は、言うまでもなく彼女の親友フローレンス・ウィルソンである⁶。フローレンスの援助や人脈などが、スギモトの執筆と新聞への投稿を可能にしたと思われる。フローレンスは、シンシナティでスギモトを迎えたオーベット・ウィルソン夫妻の姪(ウィルソン氏の兄の娘)にあたる。当時夫のオーベットは72歳、妻アマンドは66歳であった。オーベット夫妻は教科書出版事業で財を成し、教会や大学などにも多額の寄附をするなど慈善活動家として地域の尊敬を集めていた。海外旅行の経験も豊富で、1887(明治20)年日本を訪れ4、5か月滞在し、それが契機となったのか、親日家であった。その旅行に姪のフローレンスも同行し、彼女も日本に対して興味関心を持つようになり、日本についての書物はほとんど読むほどになったという。大学時代の彼女は、ニューオールバニーにあるデポー女学院(DePauw College for Young Women)で学び、特に英文学とシェークスピアを研究していた。内田によると、当時のアメリカの大学では、選ばれた学生が卒業式でエッセイを朗読するのが慣習だったという。成績優秀だった彼女は8名のうちの一人に選出され、「女性の

⁶ 内田義雄は『鉞子』において、フローレンスを含めスギモトを支えた周囲の環境についても目配りをして論じている。フローレンスについてはとくに内田、『鉞子』131-156に詳しく述べてある。

王国」という題のエッセイを読み上げた。その内容は、家庭における女性の役割の重要性を強調するものだったという。そこには、スギモトの抱く女性観と相通じる点があり、二人が意気投合する理由であったと考えられる。また作家志望だった彼女は、「シンシナティ婦人出版倶楽部」に所属し、エッセイや詩などの執筆活動を行っていたという。また、フローレンスを含めてスギモトの周囲にあった女性たちのコミュニティも、彼女に多大な影響を与えたと考えられる。それはシンシナティのカレッジ・ヒルにあった「進歩クラブ」と呼ばれる文芸倶楽部で、会員たちは交代で各自の自宅でお茶会を開き、様々なテーマについて会話や議論を楽しんだようである⁷。彼女や彼女をめぐる周辺の事情については、重要でありながら、まだまだ不明な点が多い。どのような価値観や日本観をフローレンスが持っていたのか、また彼女の人脈、そしてどのように彼女がスギモトの執筆活動を支援したのだろうか。佐々木佳子によれば、スギモトの娘婿（次女千代野の夫）で福沢諭吉の孫である清岡暎一氏が、『武士の娘』の英文を読むとフローレンスによる表現だと思われる箇所が多くあり、この著書が二人の共著だと言ったほうが正しいとの印象を、「武士の娘研究会」で語ったことを紹介している⁸。このような二人の関係は、英詩人の野口米次郎と前妻のレオニー・ギルモアとの文筆における協力関係とも似ており、当時のアメリカにおける日本人が英語で作品を出版し、作家となって大成するためには、彼（女）らを陰に陽に支えたアメリカ人文筆家たちの協力が不可欠であったことを暗示していよう。

また、各新聞社において、なぜスギモトの作品が掲載されたのか、果たして日本文化論を読みたいという読者の需要があったのだろうかという疑問が浮かぶ。その当時の日本については、新聞においてどのように報じられていたのだろうか。試みにスギモトの作品が掲載された時期の新聞を調査してみると、彼女を紹介した興味深い記事を発見した。それは『インクワイアラー』1901年3月1日に掲載されている、「コミュニティ関連」(“Social Affairs”)という欄に載せられていた10行の記述である⁹ (写真1)。

つい最近、日本からシンシナティにやってきたエツ・スギモト夫人が「日本の作法と習慣」(Japanese Manners and Customs)と題する魅力的な話を昨夜、クリフトンのゴルフ愛好家クラブ(Golfers' Club)で行った。その話は多くの美しい日本の習慣や興味深い点が満載であった。主催者は、アレクサンダー・ルイス夫人、スギモト夫人、グリーブ夫人、パートン女史、フレッド・ヒンキー氏、E.モートン氏、スティール氏である。(筆者訳)

この記事は小さなものであるが、シンシナティに来て約3年後、すでに当地のコミュニティのなかに溶け込み、日本の作法や習慣について英語で説明し、さらにそれが会員たちに好意的に受け止められているのが窺える。同日の全12頁からなる『インクワイアラー』紙全体を見てみると、1面は殺人事件やマッキンリー大統領のフィリピン統治についてなどの注目すべきトップニュース、2面は政治、3面は町のローカルニュース、4面はスポーツ、5面は経済やビジネス関連、6面はさまざまな注目ニュース、7面は現代的トピックのニュース、8面は劇場などの娯楽について、9面は鉄道や農業関連、10、11面は広告や掲示板、12面は社会ニュースと広告という内容になっている。その7面に掲載されていたのがスギモトを報じた上の記事である。この紙面ではとくに「インクワイア

⁷ 内田、『鉞子』, 129。青柳保子はカレッジヒルの当時の様子を現地調査から探っている。青柳保子「杉本鉞子の面影をたずねて—カレッジヒルの人々」『長岡郷土史』2008年, 125-135。

⁸ 佐々木, 『武士の娘の周辺』, 142。

⁹ “Social Affairs,” *Cincinnati Enquirer*, March 1, 1901.

ラー最近の話題」(“Enquirer Review of Current Topics”)として特集記事「1世紀前のアメリカ的生活―女性の服装」(“American Life a Century Ago: A Woman’s Costume”)や、「女性の世界」(“In Woman’s World”),「女性がスクワイア・デュモン法廷で世間を騒がせる」(“Woman Creates Scene in Squire Dumont’s Court”)など女性たちの社会的活躍を報じる記事が頁を占めている(写真2)。女性読者を意識した紙面のようだ。スギモトの執筆を支え、その内容が充実したものになるよう促したのはフローレンスやカレッジ・ヒルのコミュニティだったと思われるが、加えて、この当時のシンシナティにおける女性読者の存在があったからこそ、彼女の記事が掲載されるという運びになったのではと考えられる。また、スギモトの話を好意的に評価している様子から、日本文化への興味関心が女性たちの間にあったことも推察できる。その点については、19世紀半ば以降、ヨーロッパに端を発したジャポニズム、そして19世紀末頃からアメリカの女性読者たちの間で人気を博したジャポニズム小説の影響などが考えられる¹⁰。

また、日本についての記事も、同時期の新聞に散見される。アメリカの一都市において日本の情報というのは、継続的に報じられていたようだ。たとえば、上述の記事と同日の6面に、「モーガン企業組合の理念に基づく日本帝国の製鉄会社、アメリカ的手法を調査」(“Based on Morgan Syndicate Idea Is Japan’s Imperial Steel Company. Agent Investigating the American Methods.”)の見出しで、八幡製鉄所の創業に尽力した、金属工学者の大島道太郎が技術研修のためにアメリカに訪問したニュースを報道している¹¹。日本が富国強兵を掲げ近代国家の建設に努力している姿を伝えており、当時のアメリカにこうした日本イメージが伝わっていたと考えられる。

同様に『ブルックリン』においても、スギモトの記事「ミカドの国で」が掲載されている同日の紙面に、日本の文化についてのかかなり大きな記事が掲載されている。それは「日本で行われるフェンシングは最も凶暴な娯楽」(“Fencing as Conducted in Japan Is a Most Ferocious Pastime”)という記事である¹²(写真3)。ここには日本の剣道(フェンシングと紹介されている)が、ヨーロッパのような、動く位置を一定に保ち、決まった伝統的な振りの形があるフェンシングとは異なり、より凄まじい、戦いのような娯楽であると紹介されている。竹刀を振り戦いに熱中する二人の様子が、写真付きで詳細に説明されている。その内容についての真偽はここでは問わないが、見出しにもあるように、日本の剣道が、アメリカ人読者にとって暴力的なものに映っており、それは日本の脅威的なイメージを読者に植え付ける可能性があったと思われる。ここには日本が1894年の日清戦争で中国を破り、軍事力を強化し台頭していく状況が、重ね合わせられているだろう。

また、『インクワイアラー』とスギモトとのつながりについて言えば、注目すべき事実がある。実はこの新聞社には、日本文化紹介者として著名だったラフカディオ・ハーンが、1874年から1875年まで記者として勤めていたのだ。ハーンは1871年に後見人だった大叔母が破産したことから、遠戚を頼り、イギリスを出て1879年にシンシナティに渡った。そして1872年から『インクワイアラー』の積極的な寄稿者となり、1874年には正社員となった。そして凄惨な殺人事件「タン・ヤード事件」によって、事件記者として名を上げた。当時のハーンはもち

¹⁰ アメリカにおけるジャポニズム小説、女性読者の存在、そこに描かれる日本表象については、羽田美也子『ジャポニズム小説の世界―アメリカ編』(彩流社、2005)が詳しい。

¹¹ “Based on Morgan Syndicate Idea Is Japan’s Imperial Steel Company. Agent Investigating the American Methods,” *Cincinnati Enquirer*, March 1, 1901.

¹² “Fencing as Conducted in Japan Is a Most Ferocious Pastime,” *Cincinnati Enquirer*, June 1, 1902.

ろん日本には行ったことがなく、日本についての記事など書いてはいない。しかし、その後のハーンの日本での活躍、書籍の出版などを、『インクワイアラー』の記者や読者たちが知っていたとすれば、彼や彼の著作を通じて、日本への関心が持たれ、それがスギモトの原稿に興味を示し、掲載するきっかけになったかもしれない。実際に『インクワイアラー』には、日本におけるハーンの足跡を報じる記事が2点見つかった。その一つが、「ラフカディオ・ハーン—かつてシンシナティで著名だった紳士の近況」(“Lafcadio Hearn: Whereabouts of a Gentleman Once Well Known in Cincinnati”) (1891年7月12日)である¹³。ここにはかつて『インクワイアラー』の著述家だったハーンが (Mr. Lafcadio Hearn, the litterateur formerly of *the Cincinnati Enquirer*)、日本の大学の教授として定住し、日本の宗教を研究していること、そして日本女性と結婚して西洋文明に別れを告げたということが報じられている (写真4)。文面から推測すると、おそらくハーンはニューオーリンズに住む彼の友人に、自身の近況について手紙を送ったようで、それがその友人から『インクワイアラー』社に届けられたようだ。また1904年の1月にも、ハーンの日本での消息を告げる記事が掲載されている¹⁴。ハーンとスギモトの間接的な関わりについてもより調査する必要がある。さらにはハーンとの関連に加え、このシンシナティにおける日本趣味ブームの状況、またもともとドイツ系移民が多いという特徴などから、移民や外国人に対する関心が比較的高かったのではないかという、シンシナティの土地柄の問題なども、スギモトの作品背景を考察するうえで考慮すべき点だと考えられる。それらの観点は、ニューヨークでの彼女の文筆活動においても同様である。

5. おわりに

以上のように、本稿ではまだ本格的な研究がなされていないスギモトの初期作品、とくに20世紀初めの第一期の作品に着目し、そこに見られる日本文化論の特徴、および彼女の作品が掲載されるに至る背景について、新たに発見した新聞記事なども交えながら、判明している範囲で推察した。今後、課題点、不明な点、調査すべき点について研究を積み重ねていきたいと思うが、スギモトの一連の作品に表れる日本表象や作品の掲載、書籍出版に至る背景の研究は、19世紀末から盛んになった日米の文化交流、そしてその際に作り上げられていった日本イメージの詳細や変遷を考察する際に、重要な要素であると考えている。前述したようなハーンをはじめとする外国人による日本表象、新渡戸稲造の『武士道』、ジャポニズム小説群、スギモトと同様にアメリカ人女性に執筆を支えられた野口米次郎、また西海岸を中心に作り上げられた在米日本人社会とそこでの文学活動など、これまで別々に取り上げられ考察が深められてきた文学をめぐる状況を、統一的に、また俯瞰的に研究し、その間に見られる直接的間接的なつながりを明らかにしていく必要があるだろう。習作時代を含むスギモトの執筆活動、および作品全体の研究は、そうした19世紀末から20世紀にかけての日本表象、異文化交流をめぐる研究の発展に寄与すると思われる。

水野 真理子

¹³ “Lafcadio Hearn: Whereabouts of a Gentleman Once Well Known in Cincinnati,” *Cincinnati Enquirer*, July 12, 1891.

¹⁴ “Where Is Lafcadio Hearn? The Questions Asked by Tourists in Japan,” *Cincinnati Enquirer*, January 28, 1904. ただしこの記事では、ハーンが日本のどこにいるのか行方がわからないという内容である。

富山大学医学部（教養：英語）

本研究は JSPS 科研費 16K02485 の助成を受けたものである。

[表 1]

The Cincinnati Enquirer

March 17, 1901	Quaint Japan: Dedicates This Month of March to Its Gentle Women Folk 古風な日本―この 3 月をしとやかな女性たちに捧げる
日本には各月に特別な祝いがあるが、3 月は雛の節句と呼ばれる祭りだ。この日だけが唯一、日本の女の子たちが兄弟よりも祝福される。起源をさかのぼれば 2000 年の歴史を持つが、現在の実践的な教育の形となったのは 200 年前からにすぎない。すべての女子たちが、役立つ家庭の主婦、奥ゆかしい女主人、忠実な妻、そして賢い母であるために、この機会をもって注意深く教育されることの必要性が考慮されてきた。アメリカで売られているのとは異なり、日本においては雛人形は子供の玩具ではない。2 月の末から少女たちが、掃除、料理、飾り付けなどすべての雛まつりの準備をする。そのなかで少女たちは、どのように繊細な陶器や家具などを扱うか、料理を客人に振る舞う作法などを学ぶ。	
July 28, 1901	Spirit of the Dead 死者の魂
今月は奇妙だが美しい盂蘭盆、「帰ってくる靈魂への祝宴」が行われた。この祝いは亡くなった両親や友人に愛情や敬意を表するための祭りである。全体的におおよそ同じ形式で行われている。盂蘭盆はサンスクリット語で 1800 年前に仏教とともに日本にもたらされたが、この習慣は輸入された仏教と古来の伝統的な神道とが融合した、日本に起源をもつ行事である。町の通りには綱や紙でできた提灯がかかっている。個々の家では新しい着物を着て、ご馳走を準備し、床の間も飾る。13 日の日の入りの頃にはすべての準備が整い、黄昏時になると、提灯に火が灯る。そして神社の扉が開かれて人々が参拝に訪れる。盆の時期は召使いたちも主人から贈り物をもらう。物乞いたちもお盆の期間は施しを受ける。幸せと優しさの普遍的な精神は、地獄に住まう魂たちにも向けられる。寺では盆踊りも行われる。魂であるおしょうらいさまは 16 日の早朝まで滞在している。夜明け前には川、池、湖や海に人々が集まり、灯籠を流して来年の再会を約束し、おしょうらいさまと別れる。	
October 27, 1901	The Japanese Halloween 日本のハロウィーン
どの国でも見られるように日本にも収穫祭がある。古代の暦、太陰暦によると 8 番目の月の 15 日、太陽暦によると 9 月の満月の日に行われる。外国のハロウィーンと似ているがより芸術的で詩的な祝いだ。月のように丸い野菜や果物、団子がお供えされる。月に兔がいるという伝説から兔の形をしたさつまいものお菓子も作る。寺や山へ弁当を持って月見のピクニックにでかける家族もいれば、家で月見を楽しむ家庭もある。窓を開け放して静かに夜空と月明かりを楽しみ、月について俳句や短歌を詠む。田舎ではハロウィーンのジャック・オー・ランタンのように、西瓜の中をくりぬき、そこに蝋燭を灯す。14 歳から 20 歳の若い男性もこの祭りを楽しむが、若い女性はあまり楽しめない。むしろ「かぼちゃ」のようだと容姿をからかわれる場合もあり、苦痛である。また物惜しみをする農家にとっても、農作物を分け与えることが期待されるこの時期は苦痛である。	

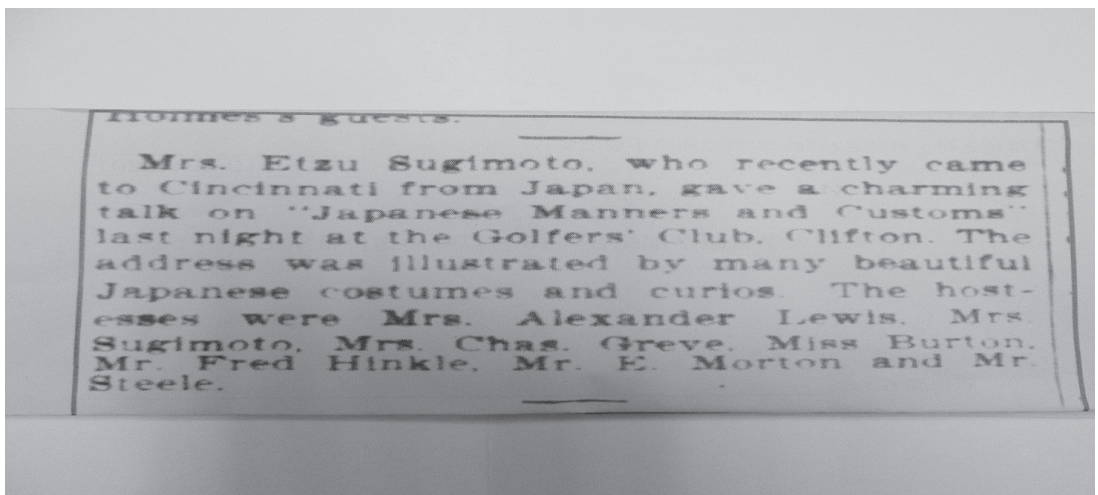
December 22, 1901	Japan's Pathetic Struggle 日本の哀愁漂う悩み
<p>日本は現在どのような服装をするべきかという点に非常に関心を持っている。この議論はペリーが日本にやってきた 50 年前から起こっている。武士は武器の扱いのしやすさを考えて洋服を着用するようになった。生活習慣の変化、海軍陸軍などの改善により服装も変わってきている。外国の人々は日本人が洋服を着用するようになったと理解しているかもしれないが、実際はそうではなく、家に戻れば着物に着替える。また東京や長崎では和服と洋服の混合がみられ、少女たちは洋装の髪飾りなどを付けたがる。日本は封建制度から急激に近代化し、階級の変化も急に起こった。にわかに上流階級になった人々には日本の伝統をよく知らないまま、洋装を採用している人がいる。日本の文化と西洋の文化のミスマッチが見られる。日本は新しい西洋文化への順応に急いでいるが、本来の日本的文化の良さは何百年も前から培われてきたもので簡単には失われない。</p>	
June 8, 1902	At Home in Japan 日本の故郷にて
<p>仏陀の誕生を祝う記念日のお涅槃が行われている。通りには多くの正装した子供たちが集まっている。シンシナティから来た友人と娘と一緒に寺へお涅槃の祝いに出かけた。お涅槃にちなんでは古い話がある。それは雑貨屋の美しい娘、14 歳のお七の逸話である。お七の家が火事になり、父が熱心な檀家であったことから吉祥寺の境内に家族はしばらく住むことになったが、そこで寺の敷地内に居住していた貴族の息子と恋に落ちた。数週間のち家が建て直され寺を出ることになり、無垢な少女お七は、もう一度火事になればまたその男性と一緒にいられると思い、わざと家に火をつけた。しかし意図的に火をつけた者は火あぶりの刑に処せられる。判事たちはその少女を不憫に思い彼女を救おうと試みた。当時法的責任が問われる年齢は 14 歳からだったため、裁きが行われる際に判事は「14 歳には見えないね」と言って罪を逃れる道を与えようとしたが、真実を言うことが美德と教育されてきたお七は正直に自分の年齢を答えてしまった。</p>	

The Brooklyn Daily Eagle

June 1, 1902	In the Land of the Mikado (『インクワイアラー』にも同日に同記事掲載) ミカドの国で
<p>サンフランシスコに寄港後 6 日経ち、横浜の元浜町にある宿、松坂屋に宿泊した。ハワイを出るときには、デッキは赤い花のレイをかけた人でいっぱい、音楽隊の演奏で見送られた。そして日本へ向かったが到着前日は嵐に見舞われ、富士山が見えずがっかりした。「妖精のようだ」と外国人が日本について表現するように、すべてが光っていて玩具のように見えた。人力車に乗って通りを行くが、開花を待つ桜や梅の枝が家の垣根から伸びているのを見ると、日本に帰ってきたという喜びにあふれた。通りは箒で掃いたようにすべてが清潔に見える。出迎えられた宿は素敵な部屋で床の間に掛け軸がかけられている。最初の夜は、通りに響く物音、通い船の汽笛やお餅売り商人の声などが気になった。アメリカの友人と娘とともに朝食を食べる。お膳が運ばれ日本の古いしきたりが一気に蘇ってきた。</p>	
July 6, 1902	Cherry Blossom Season : A Holiday Time in Japan 桜の季節—日本でのある休日
<p>今日私の心は「懐かしい故郷」の歌を歌っている。故郷の山々、谷、子供時代に私の世話をしてくれた召使たち、</p>	

<p>父の兜、そして唯一の私の母、これらに代えられるものは何もない。こうした気持ちは日本、アメリカ両方の娘たちにあるものだ。その間の差異はただ、アメリカの女性は自分の心情をうまく表現するが、日本の女性はそれができず静かに黙っている点である。4 年間は長い時間であった。久しぶりに帰ってきた故郷はずいぶんと変化していた。伝説にあふれていた村はビジネスが浸透した村になり、大小の地獄があると考えられていた近くの湖の土地も、アメリカのスタンダードオイル会社を買収されていた。花見の季節で日本中美しい桜が咲いている。名所は御殿山、東京芝神社、隅田川、玉川沿いの桜だ。私たち日本人は花を愛する人々だ。家の小さな庭も花でいっぱいになる。各花の美しい季節には、花を愛でる旅行者たちが行き交う。美しい色合いのよつめをアメリカの友人はとても喜んだ。すべての人が自然を愛し、その自然を詠む詩人であるのは日本人だけだ。人々は花見を楽しみ、俳句や短歌を作る。また日本の庭師は芸術家である。子供たちもお店で小さな箱庭を買う。</p>	
October 12, 1902	<p>Sad Ceremonial in Memory of the Dead: A Picturesque Japanese Custom</p> <p>死者を偲ぶ悲しい儀式―絵画のような日本の習慣</p>
<p>命日の祝いについて話したい。父の命日の朝、村人たちが集まり、9 時までには庭も家の前の通りも、袴と大きな藁帽子を着用した人々でいっぱいになった。これらの衣装はかつては大名行列の際に着用されたものだが、今では葬式や法事のときのみになっている。お坊さんたちはそれぞれの階級を示す色の袈裟を着用している。お坊さんたちが先頭に立ち、行列を導いて寺に向かう。父の葬式の参列のときは胸がはりさけそうな悲しみであったが、この法事においては悲しみの行列ではない。寺院の階段状の祭壇には父の碑や蓮の花、供え物などが置いてある。お香を焚くのがこの儀式の最も魅力的な部分である。すべての村人が父を偲び讀えてくれる。お墓へ行く前には親戚たちが個室で精進料理をいただく。そして墓には水をかけて拝む。</p>	
November 30, 1902	<p>Wrestling Japan's National Sport レスリング 日本の国技</p>
<p>長岡では様々な行事が行われる。数週間前には 3 日間にわたる相撲の試合があった。3,000 人も収容できる櫓と相撲小屋が作られる。太鼓の音はその日の晴天を神々に祈るためのものだ。初日の早朝 4 時になると太鼓が鳴って相撲の開始を告げる。5 時頃までには準備を行う人々で通りは混雑する。私のアメリカの友人が、日本ではすべてが小さく華奢で、力士だけが唯一大きいものだと聞いた。力士たちは実際大きいと同時に機敏である。彼らの大きな体は天からの授かりものだと感じ、誇りを持っている。力士たちに加え、審判たちもいるが、彼らはかつての有名な力士で引退した人びとだ。取り組みは 8 時に始まるが、人気の取り組みは後にとっておかれる。金持ちも貧しい人もみんな観戦に訪れる。東京で行われる相撲と地方で行われる相撲とは、その環境や見物客たちの様子が異なっている。</p>	
December 7, 1902	<p>Odd Old Time Wedding Customs Are Still to Be Seen in Japan</p> <p>奇妙な昔の結婚式の慣習が日本でまだ見受けられる</p>
<p>日本の多くの祝い事のうち、結婚式が最も盛大で特徴的なものである。それは宗教的信仰と詩的な考えと古代からの伝統的習慣の結集だからである。その詳細は都市部と田舎、また各階級では異なっている。しかし基本はすべて同じである。数年前に出席した結婚式のこと。日本では結婚は個人と個人の契約というより家と家との結びつきである。子供を結婚させるまでが親の務めと考えられているので、ふさわしい相手を探すことも親の責任である。習</p>	

慣や味の好みについても親たちは調べるのである。そして仲人が各家を訪れた時に、近所の人々はその家が結婚に向かっていることを知る。近年では若者同士のみで、ピクニックや芝居を観に出かけ、二人で会ってから結婚を決める場合もある。



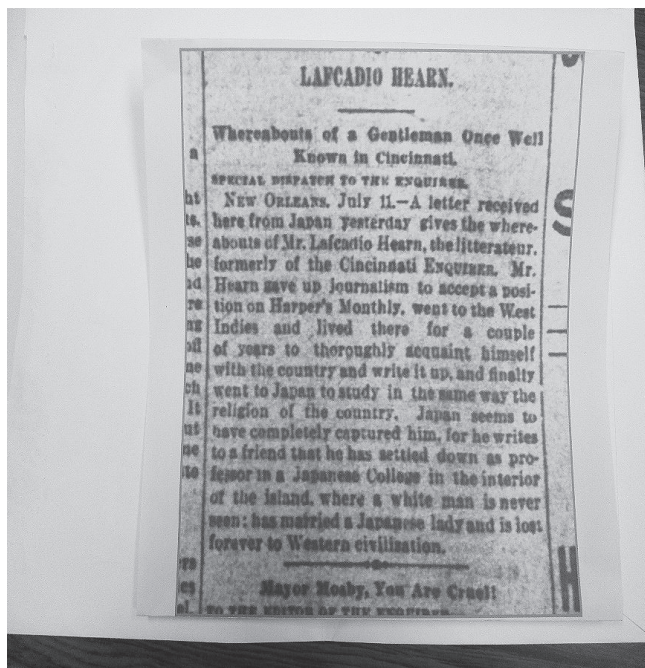
[写真1] 「コミュニティ関連」欄掲載のスギモトについての記事（『インクワイアラー』1901年3月1日）



[写真 2] 同紙面にみられる女性のファッション特集記事『インクワイアラー』1901年3月1日)



[写真3] 日本の剣道についての紹介記事(『ブルックリン』1902年6月1日)



[写真4] ラフカディオ・ハーンの日本での近況を報じた記事 (『インクワイアラー』1891年7月12日)

教育報告**非接触式カードリーダーによる学生の出席管理方法**

堀 悦郎

1. 要旨

大学生の講義への出席記録管理は、教員の職務である。出席記録管理は、正確さを求めれば手間がかかり、手間を省こうとすれば正確さが低減するのが現状である。近年、紙媒体による出席記録管理に代わり、IC 学生証による出席管理システムが全国的に利用され始めている。しかし、初期設備投資に費用がかかるという問題が存在しており、富山大学では未だ全学導入されていない。そこで、安価な IC 学生証出席管理システムの構築を試み、実際に運用検証した。本システムは、3000 円以下の非接触式カードリーダー、ノートパソコンおよび Excel 上で動作するツールで構築されている。手続きは、初回の講義時に IC 学生証の物理的な ID (IDm) を登録し、2 回目以降は IC 学生証をカードリーダーにかざすことで Excel の名簿上に打刻（日付と時刻を記録）した。初回の IDm 登録時には一人当たり 10 秒程度の時間を要したが、2 回目以降の出席記録は 100 名程度の講義であっても 5～10 分以内に終了した。さらに、集計など事後処理にかかる時間も 2～3 分であった。これらのことから、本法は大人数講義型の科目における出席管理システムとして有用であると考えられた。

2. 緒言

大学教育における授業への出席記録は、大学教員の職務として必要な業務の一つである。しかし、多くの学生を対象とする講義では、1 回の講義であっても学生の出席記録を正しく行うのは容易ではない。講義型科目における学生の出席記録は、様々な方法で行われている。教員が学生名簿を基に氏名を呼び、出席している学生が返答する方法（点呼法）は、最も基本的な方法であろう。点呼法は、本人確認を比較的正確に行えるという利点があるが、大人数の講義では教員が学生の顔や声を記憶しきれず、その利点がなくなってしまう。また、毎回の講義開始前に点呼を行っていると、大人数の場合は講義時間を削られるという欠点もある。従って、点呼法は少人数の講義に適した方法である。一方、紙媒体を用いる方法もいくつかある。まず、履修票を学生 1 人に 1 枚ずつ配布し、学籍番号と氏名を記入させる方法がある（履修票法）。履修票法は、富山大学杉谷キャンパスでは専用の用紙が用意されており、教員が履修票を独自に作成する必要はない。この方法の利点として、学生 1 人に 1 枚の履修票を手渡しすれば、比較的正確に出欠を把握できる点が挙げられる。しかし、欠席する学生が予め入手した履修票に必要事項を記入し、出席する学生に手渡して提出してもらえば不正行為が可能である。また、大人数の講義で履修票の数が多くなると、履修票を配布する手間がかかる他、授業後の

集計など事後処理にも時間がかかるという欠点がある。これとは別に、学籍番号と氏名を記入する表を回覧し、1枚の紙に複数名の学生が学籍番号と氏名を記入する方法がある（氏名一覧回覧法）。この方法は、記録用紙が少量で済み、事後処理の煩雑さも履修票法に比して少ないという利点を有している。一方で、氏名一覧回覧法は出席している学生が欠席している学生の学籍番号および氏名を記入する不正行為（代筆行為）が行われる可能性が高いという欠点を有している。紙媒体による出席記録には、教員によって不正防止の工夫を凝らした亜種がある。例えば、履修票法については、大学で用意されている履修票を用いず、日付と教員印が捺印された独自の出席カードを学生に一人一枚配布している例もある。この方法には、学生が事前に履修票を用意することで実際には出席していないのに出席したこととする不正を防ぐ効果がある。しかし、毎回専用の履修票を準備する必要があり、また事後処理に要する時間は多大で、教員あるいは事務補佐員の手間となっている。

一方、紙媒体に拠らない出席記録管理方法も活用されている。富山大学杉谷キャンパスでは、笹野により提唱された QR コードによる出席管理方法が知られている¹⁾。この方法では、予め学籍番号を QR コード化したラベルを作成して学生に配布しておく。授業の際には、教員は使用する教室の座席配置を図にした座席シート票を用意しておき、出席した学生が自身の QR コードラベルを座席シート票の自分が座っている席に貼付する。教員は、QR コードのラベルが貼付された座席シート票を読み込むことで、「どこの席」に「どの学生（学籍番号）」が座っているのかを把握して出席確認を行う。この方法は、QR コードの作成にやや手間がかかるものの、紙媒体に比べると大幅に事後処理にかかる手間が省けるという大きな特徴を有している。

このように、出席記録管理の方法が多々考案されている背景として、学生の相次ぐ不正行為が挙げられる。富山大学医学部および薬学部では、それぞれの学部規程により期末試験の受験要件として 2/3 以上の出席が必要であると明記されている（富山大学医学部規程第 7 条 2、富山大学薬学部規程第 6 条 2）。しかし、学生は講義に出席しないでなるべく楽をして単位を得ようとする。そのため、学生は出席したように見せかける不正を行う。一方、教員側も不正行為を防ぐため、様々な方法を考案するものの、いずれの方法についても一長一短があると言えよう。出席管理の正確さを期すれば、それだけ処理等に手間がかかる。一方、出席記録にかける手間を省こうとすれば、正確さにかけるのである。従って、学生の講義への出席記録で問題となるのは、正確な出席記録に係る費用対効果である。

2017 年（平成 29 年）現在、富山大学では学生証として FeliCa による IC 学生証を採用している。この IC 学生証には、学生の学籍番号、氏名その他、学内で使用可能な電子マネーの情報などが書き込まれており、個人情報が含まれている。しかし、FeliCa の IC には、上記の個人情報とは別に、IDm と呼ばれる IC の識別情報が存在している。IDm は、IC チップ製造時に IC チップそのものに記録された固有の製造番号であり、一度記録された IDm は書き換えることはできない。IDm は 8 byte（16 桁）の数字および文字で構成されており、一つ一つの IC に独自の IDm が割り振られているため、同じ IDm は存在しない。これらのことから、IDm は固有 ID としての応用範囲が広く、この ID 番号を使ったアプリケーション・システムが広く普及しており、無償のツールも配布されている。従って、個々の学生証の IC に固有な IDm を用いれば、学生証に記録されている個人情報には一切アクセスせずに講義への

出欠管理が可能である。本稿では、IC 学生証から無償ツールを使って IDm を読み取ることで、比較的安価で正確な出欠管理システムを構築し、その実用性を検証したので報告する。

3. 方法

3.1. ハードウェア

検証に用いたノートパソコンおよびタブレットパソコンの一覧を表 1 に示す。ノートパソコンは東芝 Dynabook Statellite T30 および日本ヒューレットパッカー HP Mini 5103 である。タブレットパソコンは、Microsoft Surface Pro4 CR3 および Lenovo IdeaPad Mix10 である。

IC カードリーダーは、非接触 IC カードリーダー・ライター PaSoRi (RC-S380, Sony, 東京)を使用した。このカードリーダーは、USB でパソコンと接続でき、標準でドライバおよび基本ソフトウェアが付属している。カードリーダーに付属の基本ソフトウェアは、実際に出席記録システムとして使用する前の動作確認のみに使用した。2017 年 9 月現在、PaSoRi (RC-S380)の販売価格は、店頭価格で 2,700 円前後、通販価格では 2,500 円前後となっている。

表 1. 検証に用いたパソコンのスペック等

メーカー	モデル	OS	クロック 周波数	RAM	Excel ver
東芝	Dynabook Statellite T30	Windows XP (32 bit)	1.6 GHz	2 GB	2007
日本ヒューレ ットパッカード	HP Mini 5103	Windows 7 Pro (32 bit)	1.5 GHz	2 GB	2010
マイクロソフト	Surface Pro4 CR3	Windows10 Pro (64 bit)	2.4 GHz	8 GB	2016
Lenovo	IdeaPad Mix10	Windows 8 Pro (32 bit)	1.8 GHz	2 GB	2013

3.2. ソフトウェア

IC カードリーダーのドライバおよび基本ソフトウェアとして、IC カードリーダーに付属の NFC ポートソフトウェア (Sony, 東京)を用いた。その他のソフトウェアとして、Microsoft Excel および Manica Excel Tool (株式会社ハヤト・インフォメーション, 東京)を組み合わせ使用した。Manica Excel Tool は、カードリーダーで読み取った IDm をエクセル上に記録できる他、エクセル上に記載された IDm とカードリーダーの IDm を照会可能な無償ツールである (以下のサイトから無償でダウンロード可能

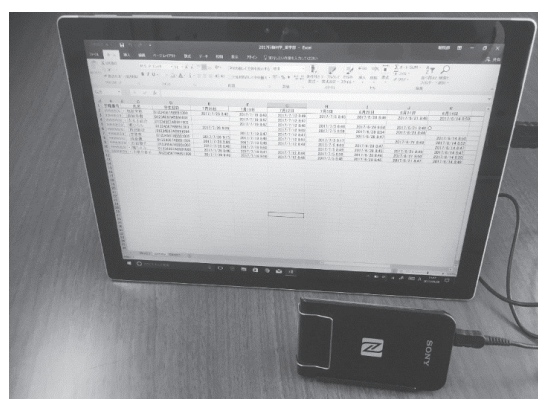


図 1. ハードウェアの組み合わせ例

マイクロソフト社の Surface Pro と Sony 社の非接触 IC カードリーダーを接続している。画面には Excel の名簿 (ダミー) を表示してある。

である：http://www.hayato.info/manicacool.htm)。Manica Excel Tool は、Excel 2007 または Excel 2010 上での動作確認がされているが、2017 年 9 月現在、Excel 2016 でも出席管理システムとしては問題なく動作している。

3.3. 検証方法

検証期間は、2013 年 4 月から 2017 年 7 月までの 4 年 4 カ月である。対象学生は、富山大学医学部医学科、看護学科および薬学部 1～2 年生で、対象科目は行動科学（2013 年 4 月～2017 年 7 月）および心の科学（2017 年 4 月～2017 年 7 月）とした。いずれの科目も講義形式の科目であり、実験、実習および屋外活動は含まれない。行動科学の受講者数は 79 名から 129 名（平均 99.8 ± 15.2 名）であった。一方、心の科学は単年度のみを検証であり、受講生は医学部 171 名、薬学部 87 名であった。

手続きの流れを図 2 に示す。まず、講義開始前にハードウェアとソフトウェアを準備した。その後、Manica Excel Tool をダウンロードした（http://manica.jp/）。個々の科目別の準備として、受講生名簿を用意した。名簿は、学務情報システムに当該学部学科学年の名簿がエクセルファイルとして準備されているので、それをダウンロードした。前もって履修登録がなされている場合には、履修者名簿をダウンロードした。学生名簿の内容（学籍番号および氏名）

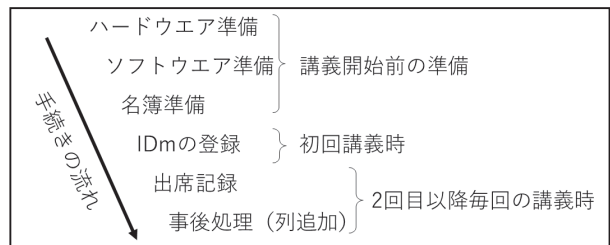


図 2. 手続きの流れ

ハードウェア、ソフトウェアおよび名簿の準備は、講義開始前に教員が行う作業である。初回の講義時には、教員のサポートの下で学生がパソコンを操作して IDm の登録を行う。2 回目の講義以降は、学生が IC 学生証をカードリーダーにかざして打刻し、講義終了後に教員が事後処理を行う作業の繰り返しとなる。

をコピーして Manica Excel Tool を含む Excel シートにペーストし、Manica Excel Tool が使える名簿を準備した。その後、Excel のツールバーから「アドイン」を選択し、カードリーダーの設定で Sony 社のリーダーを使用するにチェックを入れた。これにより、Sony 社のカードリーダーと Excel が Manica Excel Tool を介して連結される。名簿がペーストされた Manica Excel Tool は、科目名や対象学部名などのファイル名を付して保存した。ここまでは、講義前に教員が準備する手続きである。この事前準備に要する時間は、Excel がインストールされたパソコンであれば 5 分程度である。

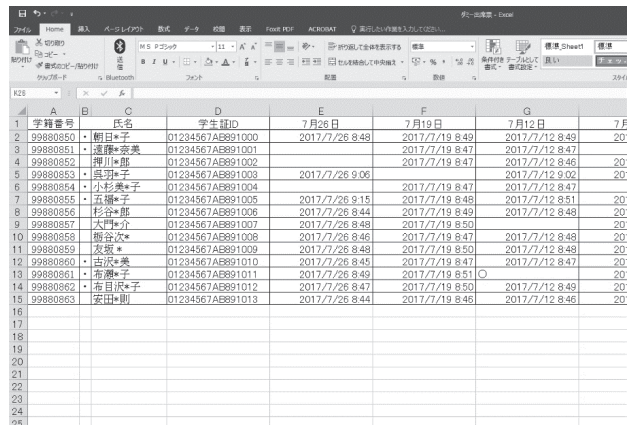
講義時における手続きは、初回と 2 回目以降で異なる。初回は、学生証の IDm を名簿に登録する必要がある。Manica Excel Tool をアドインとして格納してある

	C	D	E	F	G	H
1	氏名	学生証ID				
2	朝日*子	01234567A8891000				
3	遠藤*奈美	01234567A8891001				
4	狩川*郎	01234567A8891002				
5	島川*子	01234567A8891003				
6	小杉*子	01234567A8891004				
7	玉置*子	01234567A8891005				
8	杉谷*郎	01234567A8891006				
9	大門*介	01234567A8891007				
10	板谷*次	01234567A8891008				
11	友坂*	01234567A8891009				
12	古沢*美	01234567A8891010				
13	布瀬*子	01234567A8891011				
14	布目*次	01234567A8891012				
15	安田*剛	01234567A8891013				
16						
17						
18						

図 3. IDm が記録された名簿（ダミー）

Excel のシートに学籍番号、氏名および学生証の IDm が記録されている。

名簿を開き、ツールバーの「アドイン」から「セルへ入力する」を選択した。この状態で、学生に「自分の氏名・学籍番号の右隣のセルを選択してから、学生証をカードリーダーにかざしてください」と指示した。学生は、一人ひとりセルを選択してから学生証をカードリーダーにかざすことで、自分の学生証が有する IDm を名簿上に登録した（図 3）。その際、正しく登録できればベル音が鳴ってセルの色が変化する。IC の物理的不具合があると、ベル音は鳴らない。2 回目以降の講義時には、学生はセルをなんら選択することなく、学生証をカードリーダーにかざすだけで自分の IDm 列の右隣に日付と時刻が記録され、出席記録が可能である。実際には、ツールバーの「アドイン」から「セルを探す」を選択した状態で、学生に「学生証をカードリーダーにかざしてください」と指示をした。学生がカードリーダーに学生証をかざすと、先に記録した IDm およびかざされた学生証の IDm が照会され、名簿に打刻された（図 4）。IDm が正しく照会されればベル音が鳴るが、IDm が登録されていない場合にはエラー音が鳴る。



学籍番号	氏名	学生証ID	7月26日	7月19日	7月12日	7月5日
99880850	朝日*子	01234567AB891000	2017/7/26 8:48	2017/7/19 8:49	2017/7/12 8:49	20
99880851	遠藤*安美	01234567AB891001		2017/7/19 8:47	2017/7/12 8:47	20
99880852	押川*郎	01234567AB891002		2017/7/19 8:47	2017/7/12 8:46	20
99880853	奥羽*子	01234567AB891003	2017/7/26 9:06		2017/7/12 9:02	20
99880854	小杉*美子	01234567AB891004		2017/7/19 8:47	2017/7/12 8:47	20
99880855	佐藤*子	01234567AB891005	2017/7/26 9:15	2017/7/19 8:48	2017/7/12 8:51	20
99880856	杉谷*郎	01234567AB891006	2017/7/26 8:44	2017/7/19 8:49	2017/7/12 8:48	20
99880857	大門*介	01234567AB891007	2017/7/26 8:48	2017/7/19 8:50		20
99880858	柳谷*次	01234567AB891008	2017/7/26 8:46	2017/7/19 8:47	2017/7/12 8:48	20
99880859	佐野*	01234567AB891009	2017/7/26 8:49	2017/7/19 8:50	2017/7/12 8:46	20
99880860	古沢*典	01234567AB891010	2017/7/26 8:45	2017/7/19 8:47	2017/7/12 8:47	20
99880861	布施*子	01234567AB891011	2017/7/26 8:49	2017/7/19 8:51	○	20
99880862	市目沢*子	01234567AB891012	2017/7/26 8:47	2017/7/19 8:50	2017/7/12 8:49	20
99880863	安山*剛	01234567AB891013	2017/7/26 8:44	2017/7/19 8:46	2017/7/12 8:46	20

図 4. 出席時刻が記録された名簿（ダミー）

各行には日付が、列には学生ごとの出席時刻が記録されている。欠席の場合は空白セルとなる。G 列の○は学生証を忘れたため、紙媒体に学籍番号と氏名を記載した学生であり、教員が事後処理でチェックした結果である。

講義終了後は、事後処理として学生名簿の IDm の右側に列を挿入した。なぜならば、打刻は必ず IDm が記録された右隣の列に行われるので、列の挿入をしておかないと前回の出席記録に上書きしてしまうからである。3 回目以降は、出欠記録と事後処理（列挿入）を繰り返した。なお、学生証を忘れた学生のために出欠確認用紙を用意しておき、教員の前で学籍番号と氏名を自書させた。講義終了後、事後処理において当該学生のセルにチェックをして出席記録とした。

以上の手続きのうち、1) IDm の登録に要する時間、2) 毎回の出席記録に要する時間、3) 事後処理に要する時間および 4) 発生した不具合について調べた。なお、2) 毎回の出席記録に要する時間については、遅刻する学生や同時に配布する資料の量に依存するために正確なデータは記録できていないので、およその時間を用いた。

4. 結果

4.1. IDm の登録時間

各講義における受講学生数と初回講義時の IDm 登録時間を表 2 に示す。受講学生数には、予め学務情報システムや掲示を用いて学生証を持参するように通達してあったが、検証した期間の中では初回講義時に学生証を忘れた者が 1 科目あたり最大で 4 名いた。この場合は、2 回目以降の講義開始前に IDm の登録を行った。初回講義時の IDm 登録に要する時間は 9 分から 20 分とばらつきがあるが、こ

れは受講学生数に依存すると考えられ、100 名規模の講義であれば 15 分から 20 分程度であった。また、学生一人当たりの IDm 登録時間は、およそ 10 秒前後であった。なお、後述するが IDm の登録時に学生が他人のセルに登録してしまう例があり、その場合はやり直しをする必要があるために一人当たりの IDm 登録時間が長くなる傾向にあった。

表 2. IDm の登録に要した時間

科目名	年度	対象学生	受講者数	IDm 登録時間 (分)	IDm 登録時間／人 (秒)
行動科学	2013	医学科	107	18	10.1
		薬学部	111	15	8.1
		看護学科	80	12	9.0
	2014	医学科	105	15	8.6
		薬学部	129	20	9.3
		看護学科	83	11	8.0
	2015	医学科	106	18	10.2
		看護学科	84	13	9.3
	2016	医学科	104	17	9.8
		薬学部	102	20	11.8
		看護学科	79	9	6.8
	2017	薬学部	108	16	8.9
心の科学	2017	医学部	171	25	8.8
		薬学部	87	18	12.4

4.2. 出席記録時間

およその出席記録時間は、いずれの講義においても 5 分程度であった。同時に資料を配布した場合には配布枚数に応じて延長したものの、A4 用紙 3 枚 100 名程度に配布時の場合でも 10 分程度であった。

4.3. 事後手続き

事後手続きは、Excel の名簿ファイルを開いて学生証を忘れた学生のセルにチェックを入れ、次回のために列を追加する作業のみであり、いずれの講義においても 2 分以内に終了した。また、筆者は最近、列を追加して学生に出席回数を示すようにしているが、この作業を含めても 3 分以内にすべての事後処理が完了した。

4.4. 発生した不具合

以下に、筆者がこれまでに経験した不具合を挙げる。

4.4.1. IDm 登録時に他者のセルへ登録してしまう：学生が説明をよく聞かず、正しくない手続きをとることによる不具合である。学生証をカードリーダーにかざす動作と IDm 登録時のベル音に興味関心が強い学生は、「事前に自分の名前の右隣のセルを選択する」という手続きを忘れてしまい、急いで

学生証をカードリーダーにかざそうとする。その結果、他者のセルに自分の IDm を登録してしまう失敗をする。この場合は IDm の登録をし直すこととなる。これまでのところ、この不具合は医学科のみで発生している。

4.4.2. IDm の文字「E」により指数変換される：Excel には、セルへの入力を文字列や数値として自動認識する機能がある。この機能により、IDm に含まれる「E」という文字が指数を意味すると誤解され、8 bit (16 桁) 以上の数値として記録してしまう不具合が、2017 年度の入学生より発生した。この不具合の予防策として、IDm を登録するセルについては、事前に書式設定で「文字列」指定をすることにより解消可能であることを確認している。

4.4.3. 不正行為：学生証をカードリーダーにかざし、そのまま出席しないで退室する学生が一定数存在する。この不正行為を確認するため、2017 年度開講の「心の科学」において、一度だけ講義開始前の出席記録とは別に、講義終了時に出席記録を行った。医学部では、その日の講義開始前の出席者は 146 名であったが、講義終了時には 131 名の出席であった。一方、薬学部では講義開始前が 82 名に対し、講義終了時には 68 名であった。

5. 考察

本検証の結果、IC 学生証、非接触式カードリーダーおよび無償の Excel ツールを用いることで、出席管理が可能であることが明らかとなった。本法の特徴として 1) 一般的なパソコンと Excel 以外の設備投資は、カードリーダーに係る 3000 円程度と安価であること、2) 紙媒体を用いる出席管理方法に比べ、事後処理に要する時間と手間が軽減されていること、3) IC 学生証を用いているが、個人情報にはアクセスしていないため、個人情報保護の観点からも望ましいことなどが挙げられよう。

学生の出席管理について、古くから問題となっているのが費用対効果のバランスである。正確性を期すればその分の手間をかける必要がある。一方、手間をかけずに出席管理を行おうとすれば正確性を欠く結果となり、学生からは不公平感の訴えが生じる。本法は、学生証を用いて打刻することで正確性を担保し、かつ事後処理を軽減している点で優れていると言えよう。また、そのために特殊な装置、ソフトウェアおよび知識を必要としない点も特徴的である。

一方、今回の検証の結果、非接触式カードリーダーで出席記録をした後、講義に出席せずに退室する学生も一定数確認された。検証した科目が最終の 5 限に開講されていたため、部活動やアルバイトなどの都合で途中退室した学生も相当数含まれていると考えられる。そのため、他の時間に比べて比較的多くの学生が途中退室とカウントされていると考えられるが、1 限の場合でもある程度の人数は出席記録だけして退室していると思われる。この点は本法の脆弱な部分であるが、毎回の講義で開始時と終了時に打刻をさせれば、より正確な出席記録が可能であろう。また、IC 学生証には電子マネーの情報も記録されていることから、いわゆる「なりすまし」行為による不正は生じにくいと考えられる。今回は「なりすまし」による不正行為の防止については検証を行っていないので、今後は「なりすまし」など不正行為の発生頻度などを検証するべきであろう。

また、本法では初回の IDm 登録にやや時間を要するという欠点も存在している。しかし、使用して

いる IDm には何ら個人情報が含まれておらず、大学内の教員や事務で共有していても問題はほとんどない情報である。従って、特に 1 年次学生にあつては、学務部など事務方で IDm を一括管理して教員側に提供することで IDm 登録作業が不要になり、初回の講義時に要する時間を大幅に短縮することが可能である。今後、学務部など事務方にも本法の性質を理解してもらい、IDm の情報を教員に提供可能な制度の構築が強く望まれる。

IC 学生証を用いた出席管理システムは、ここ 7~8 年程の間に国内の大学で急速に広まりつつある。それ以前は、紙媒体による出席管理の手間を省くため、携帯電話を用いた出席管理システム^{2,3)}や、携帯電話と IC 学生証を融合させたシステム⁴⁾などが開発されてきた。これらの方法は、管理の手間を省く上では極めて有用であるが、ほぼ 100% の学生が携帯端末を日常的に使っていることを前提としており、個人資産に依存している点で問題もある。また、独自に開発した専用のアプリケーションを利用しており、汎用性には乏しい。さらに、各大学が類似のシステムを開発しようとするれば、プログラミングや IT 技術の知識が必要であり、工学系の教員に委嘱してシステムを構築する必要がある。これらの問題を解決するため、携帯端末を使用せずに IC 学生証とカードリーダーのみによる出席管理システムも構築されている⁵⁾。この方法では、携帯端末を使用しないという点で、個人資産に依存する問題を解決している。しかし、大学の教務システムとの連携の必要性から独自のアプリケーションを開発しており、他大学での有用性は不明である。また、LAN を介して情報のやり取りがあるため、個人情報の保護の点でやや不安材料が残る。一方、本法は Excel 上で動作する無償のツールを用いることで出席管理を可能にしており、システムの構築が極めて簡単に行え、かつ LAN とは無関係に動作可能であるという利点を有している。

富山大学では現在、一部の科目や行事において、IC 学生証とカードリーダーを組み合わせた出席管理を行っている。しかし、現在使用しているシステム（タイムレコーダー、PDC-300、日本システム開発株式会社、東京）では、IC 学生証のデータ領域にアクセスして学籍番号などを直接読み取るので、個人情報保護の観点からは推奨できない。また、ハードウェアの購入だけで 1 台当たり 20 万円以上の費用がかかる。富山大学五福キャンパス共通教育棟の一部の講義室では、学生の講義室への入退室記録が中央で集中管理可能なシステムも存在しているが、このシステムを全学の講義室に設置しようとするれば膨大な予算が必要となる。将来的には、全講義室で入退室管理システムを導入するように予算を確保するべきであると思われるが、少なくとも数年程度はかかるであろう。従って、大学としての施設整備が整うまでは、各教員がそれぞれ独自に工夫して出席管理を行う必要がある。この点において、本稿で紹介した方法は、安価で正確な打刻ができ、かつ管理が簡便である特徴から、極めて有用な方法であると考えられる。

6. まとめ

非接触式カードリーダーと Excel 上で動作する無償のツールを用い、IC 学生証をかざすだけで出席記録ができるシステムを構築し、運用を試みた。その結果、初回の IDm 登録時にはやや時間を要するものの、2 回目以降の講義時には短時間で正確な打刻が可能であった。また、講義終了後の出席管理

に要する時間も短時間であった。これらのことから、本法は大人数講義型の科目における出席管理システムとして有用であると考えられた。

参考文献

- 1) 笹野一洋．QR コードによる出席管理．富山大学杉谷キャンパス一般教育研究紀要，40：33-44，2012.
- 2) 松村健児，黒岩丈介，平田隆幸，久保田直行，浅井竜哉，高橋勇，小高知宏，小倉久和．携帯情報端末を利用した教育到達度評価システム：出席管理システム・授業評価システム・レポート提出管理システム．福井大学工学部研究報告，52(1)：97-104，2004.
- 3) 檀裕也．出席管理システム AMUSE の設計と開発．松山大学論集，21(2)：95-115，2009.
- 4) 新長章典．非接触型 IC カードと携帯電話を用いた出席管理・授業支援システム．京都学園大学経営学部論集，15（3）：1-15，2006.
- 5) 高尾哲康．学生証 IC カードを利用した出席管理システムの試作．富山国際大学現代社会学部紀要，8：71-78，2016.

堀 悦郎

富山大学医学薬学研究部（医学）・行動科学

訂正とお詫び

第44号の資料、水野真理子「シンシナティ時代におけるラフカディオ・ハーンの新聞記事概要（富山大学ヘルン文庫所蔵）」において、7ページ最終行と8ページ1行目が重複する誤りがありました。抜き刷りでは8ページ1行目を削除し、正しい内容を掲載するとともに、本紀要ご利用の皆様に深くお詫びいたします。

（紀要編集委員会）

（誤）

水野真理子/JLAS (vol.44, 2016) 1-15

細な分析や、ハーンの記事の真偽を特定する場合に、本資料は必ず調査対象として挙げられるものである。その意味でも、本資料は今後の研究において、十分な価値を有すると言えよう。

削除

シンシナティで出版されたハーンの寄稿記事数 1872-1878

	Perkins	Frost/Hughes	合計	檜山/ Hughes
	内訳	内訳	内訳	追加
	独自 45		P 独自 45	+Yes 11, +P14
『インクワイアラー』	共通 90	共通 90	P/F/H 共通 90	
1872-1875		独自 159	F/H 独自 159	
合計 135		249	294	
	独自 97		P 独自 97	+Yes 6, +P12
『コマーシャル』	共通 100	共通 100	P/F/H 共通 100	
1872-1875		独自 46	F/H 独自 46	
合計 197		146	243	

TOTAL: 537 +Yes 17, P26

【図表 1】 田中欣二「ハーンの寄稿と鑑定されたシンシナティの新聞記事（追加）」『へるん』第 43 巻、



（正）

水野真理子/JLAS (vol.44, 2016) 1-15

ある。その意味でも、本資料は今後の研究において、十分な価値を有すると言えよう。

シンシナティで出版されたハーンの寄稿記事数 1872-1878

	Perkins	Frost/Hughes	合計	檜山/ Hughes
	内訳	内訳	内訳	追加
	独自 45		P 独自 45	+Yes 11, +P14
『インクワイアラー』	共通 90	共通 90	P/F/H 共通 90	
1872-1875		独自 159	F/H 独自 159	
合計 135		249	294	
	独自 97		P 独自 97	+Yes 6, +P12
『コマーシャル』	共通 100	共通 100	P/F/H 共通 100	
1872-1875		独自 46	F/H 独自 46	
合計 197		146	243	

TOTAL: 537 +Yes 17, P26

【図表 1】 田中欣二「ハーンの寄稿と鑑定されたシンシナティの新聞記事（追加）」『へるん』第 43 巻、2006 年、103 頁（筆者による体裁上の加筆修正あり）。

Contents

Education Report

Eleonora Yovkova Shii

Perspectives and problems in the international education in the era of globalization
–a case study from ‘cross-cultural communication’ classes..... 1

Research Report

Mariko Mizuno

The Early Works of Etsu Sugimoto: Descriptions of Japanese Culture
and the Background to Her Work 11

Education Report

Etsuro Hori

Student attendance recording by the non-contact IC card reader 25

編集後記

富山大学新教養教育への改組にともない、1979年3月、『研究紀要：富山医科薬科大学一般教育』として創刊されました本研究紀要も、本号を持ちまして最終巻となります。刊行に尽力された方々の名前を創刊号から書き残します。新組織にてまた同様の研究紀要が再開されますことを祈念しております。

平成29年度紀要委員会

号	発刊日	編集委員
創刊号	1979.3.15	記載なし
2	1980.3.15	阿原 稔*
		上原 欣一
		小澤 浩
		永田 正典
3	1981.3.15	上原 欣一*
		小澤 浩
		廣上 俊一
4	1982.3.15	上原 欣一*
		小澤 浩
		廣上 俊一
5	1983.3.15	田辺 正英*
		常木 清
		廣上 俊一
6	1984.3.15	田辺 正英*
		常木 清
		廣上 俊一
7	1985.3.15	田辺 正英*
		常木 清
		小野寺 孝一
8	1986.3.15	田辺 正英*
		常木 清
		小野寺 孝一
9	1987.3.15	田辺 正英*
		常木 清
		小野寺 孝一
10	1988.3.15	田辺 正英*
		小野寺 孝一
		櫻井 芳雄

11	1989	記載なし
12	1990	記載なし
13	1991	記載なし
14	1992.12.21	櫻井 芳雄*
		小野寺 孝一
		阿原 稔
15	1993.11.26	櫻井 芳雄*
		小野寺 孝一
		阿原 稔
16	1994.12.20	櫻井 芳雄*
		小野寺 孝一
		高畠 純夫
17	1996.3.31	阿原 稔*
		小野寺 孝一
		櫻井 芳雄
18	1997.3.31	高畠 純夫*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
19	1997.12.24	高畠 純夫*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
20	1998.3.31	高畠 純夫*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
21	1998.12.24	阿原 稔*
		小野寺 孝一

		名執 基樹
22	1999.10.31	阿原 稔*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
23	2000.3.31	阿原 稔*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
24	2000.10.31	阿原 稔*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
25	2001.3.31	阿原 稔*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
26	2001.10.31	阿原 稔*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
27	2002.3.31	阿原 稔*
		小野寺 孝一
		名執 基樹
28	2002.10.31	谷口 美樹*
		岩岡 研典
		名執 基樹
29	2003.3.31	岩岡 研典*
		谷口 美樹
		名執 基樹
30	2003.12.25	岩岡 研典*
		谷口 美樹
		名執 基樹
31	2004.8	尾崎 宏基*
		盛永 審一郎
		名執 基樹
32	2004.12.15	尾崎 宏基*
		盛永 審一郎
		名執 基樹
33	2005.12.26	尾崎 宏基*
		盛永 審一郎
		名執 基樹
34	2006.12.25	盛永 審一郎*
		名執 基樹

		鎌田 倫子
35	2007.12.26	盛永 審一郎*
		名執 基樹
		鎌田 倫子
36	2008.12.25	盛永 審一郎*
		名執 基樹
		鎌田 倫子
37	2009.12.25	松倉 茂*
		福田 正治
		木村 裕三
38	2010.12.25	木村 裕三*
		谷井 一郎
		笹野 一洋
39	2011.12.1	谷井 一郎*
		木村 裕三
		笹野 一洋
40	2012.12.25	鎌田 倫子*
		片桐 達雄
		谷口 美樹
41	2013.12.25	鎌田 倫子*
		片桐 達雄
		谷口 美樹
42	2014.12.25	名執 基樹*
		谷井 一郎
		吉田 勝一
43	2015.12.25	名執 基樹*
		谷井 一郎
		吉田 勝一
44	2016.12.25	木村 裕三*
		山崎 先也
		吉田 勝一

* 紀要委員会委員長

創刊号～33号：『研究紀要：富山医科薬科大学一般教育』

34号以降：『研究紀要：富山大学杉谷キャンパス一般教育』

富山大学杉谷キャンパス一般教育研究紀要 第45号

2017年12月27日発行

発行所 富 山 大 学
富 山 市 杉 谷 2630
TEL. 076 - 434 - 2281

印刷所 中 央 印 刷 株 式 会 社
富 山 市 下 奥 井 1 丁 目 4-5
TEL. 076 - 432 - 6572

編集委員 木村 裕三・吉田 勝一・荒舘 忠

The Journal of Liberal Arts and Sciences

Sugitani Campus, University of Toyama

Vol. 45, Dec., 2017